

稗 田 環 濠

付、下ツ道第2・3次発掘調査報告

1992.3

大和郡山市教育委員会

例　　言

- 本書は、大和郡山市稗田町で実施した「稗田環濠」の発掘調査報告書である。
- 調査は、大和川流域総合治水対策の一環として、大和郡山市土木課により実施される稗田環濠の特定保水池整備に伴う事前調査として実施した。
- 調査期間は、平成4年3月9日より3月31日までであった。
- 現地調査は、大和郡山市教育委員会社会教育課技師　濱口芳郎が、事務一般は大和郡山市土木課が担当した。
- 現地作業については、東建設（代表者　東　正文）のお世話になった。記して感謝したい。
- 本書の執筆、製図、トレース、編集は濱口がおこなった。写真撮影のうち筒井城跡発掘調査のものについては山川均（大和郡山市教育委員会）が、他は濱口がおこなった。

本　文　目　次

I 稗田環濠の歴史と現代	
1. 環濠集落とはなにか.....	1
2. 稗田環濠集落の今昔.....	3
3. 稗田環濠集落の研究史.....	9
II 稗田環濠の発掘	
1. 発掘に至る経緯.....	11
2. 調査方法.....	12
3. 調査結果	
1) 第1トレンチ.....	13
2) 第2トレンチ.....	14
3) 第3トレンチ.....	15
4. まとめ.....	16
III 奈良盆地の環濠集落	
1. 地図に見る盆地内の環濠集落.....	17
2. 掘り出された環濠集落.....	29
3. 大和郡山市域に残る環濠集落.....	45
おわりに.....	60
参考文献.....	61

図 目 次

図1 撮影場所(1)	1
図2 撮影場所(2)	2
図3 江戸時代の地図(1)	4
図4 江戸時代の地図(2)	4
図5 明治時代の稗田周辺(S:1/20,000)	4
図6 現代の稗田周辺(S:1/20,000)	5
図7 撮影場所(3)	10
図8 トレンチ配置図(S:1/2,500)	11
図9 第1トレンチ東壁土層図(S:1/40)	13
図10 第2トレンチ北壁土層図(S:1/40)	14
図11 第3トレンチ南壁土層図(S:1/40)	15
図12 撮影場所(4)	16
図13 奈良盆地の環濠集落分布図	17
図14 広院環濠集落とその周辺(S:1/5,000 文献17より引用)	18
図15 環濠敷平面図(文献1より引用)	19
図16 上稗田環濠(S:1/2,500)	19
図17 伴堂環濠(S:1/5000 文献17より引用)	20
図18 備前環濠(S:1/5000 文献17より引用)	21
図19 備前環濠の変遷(文献14より引用)	21
図20 保津環濠(S:1/5000 文献17より引用)	22
図21 元禄17年(1704)の保津環濠(文献19より引用)	23
図22 北阪手環濠(S:1/5000 文献17より引用)	24
図23 江戸時代の今井環濠(文献7より引用)	25
図24 昭和初期の南郷環濠(文献19より引用)	26
図25 南郷環濠(S:1/5000 文献17より引用)	27
図26 古屋敷遺跡調査位置図(S:1/5,000 文献20より引用)	30
図27 古屋敷遺跡第2・3次調査トレンチ配置図(S:1/1,200 文献20より引用)	31
図28 第3次調査の各トレンチ土層断面図(文献20より引用)	31
図29 若柳庄闢遺跡第3次調査位置図(S:1/5,000 文献16より引用)	32
図30 若柳庄闢遺跡第3次調査検山構造平面図(S:1/800 文献16より引用)	33
図31 筒井城跡発掘調査位置図(S:1/5,000 文献33より引用)	34
図32 筒井城跡第3次調査検出構造平面図(S:1/250 文献33より引用)	35
図33 唐古・鍵遺跡中世環濠検出調査位置図(文献23より引用)	36
図34 唐古・鍵遺跡調査位置図(文献23より引用)	36
図35 唐古・鍵遺跡第8・22次調査検出構造平面図(文献23より引用)	37
図36 金剛寺遺跡調査位置図(S:1/500 文献24より引用)	38
図37 金剛寺遺跡検出の横梁復元図(文献24より引用)	38
図38 金剛寺集落の地割・地目(左)と推定される環濠・土壁(右)(S:1/400 文献24より引用)	38
図39 金剛寺遺跡検出構造平面図(文献24より引用)	39
図40 法貴寺遺跡調査位置図(文献4より引用)	40
図41 法貴寺遺跡検出構造平面図(S:1/800 文献5より引用)	41

図42	十六面・薬王寺遺跡調査位置図（S:1/4000 文献30より引用）	42
図43	十六面・薬王寺遺跡北I調査区検出遺構平面図（文献30より引用）	43
図44	十六面・薬王寺遺跡北II調査区検出遺構平面図（文献30より引用）	43
図45	十六面・薬王寺遺跡北II調査区検出の屋敷区画濠土層断面図（S:1/50 文献30より引用）	43
図46	発掘された環濠分布図	44
図47	現在の天井環濠（S:1/2,500）	46
図48	昭和初期の天井環濠（文献19より引用）	47
図49	現在の若狭環濠（S:1/2,500）	48
図50	天保六年（1836）の若槻環濠（文献8より引用）	49
図51	現在の井戸野環濠（S:1/2,500）	50
図52	現在の番条（S:1/10,000）	52
図53	現在の発志院・中城環濠（S:1/2,500）	54
図54	現在の北西環濠（S:1/2,500）	56
図55	現在の筒井城跡（S:1/5,000）	58
図56	大和郡山市域の環濠集落分布図	折込

写 真 目 次

写真1 稲田環濠に架かる橋（1）	1
写真2 稲田環濠に架かる橋（2）	1
写真3 見通しの悪い道	2
写真4 袋小路	2
写真5 環濠内側の土居と竹藪	2
写真6 売太神社	3
写真7 常楽寺	3
写真8 昭和38年の稗田環濠集落	5
写真9 平成2年の稗田環濠集落	5
写真10 昭和38年の稗田とその周辺	6
写真11 昭和44年の稗田とその周辺	6
写真12 昭和48年の稗田とその周辺	7
写真13 昭和55年の稗田とその周辺	7
写真14 平成2年の稗田とその周辺	8
写真15 稗田の家並み（1）	9
写真16 稗田の家並み（2）	9
写真17 稗田の家並み（3）	10
写真18 稗田の家並み（4）	10
写真19 作業風景	12
写真20 第1トレンチ全景	13
写真21 第1トレンチ掘削状況	13
写真22 第1トレンチ北壁	13
写真23 第1トレンチ出土遺物	13
写真24 第2トレンチ調査風景	14
写真25 第2トレンチ出土遺物	14
写真26 第3トレンチ設定場所	15
写真27 第3トレンチ掘削状況	15
写真28 第3トレンチ出土遺物	15
写真29 環濠の風景（1）	16
写真30 環濠の風景（2）	16
写真31 環濠の風景（3）	16
写真32 環濠を掘る	29
写真33 古墳敷遺跡第3次調査第4トレンチ検出の環濠	31
写真34 同第4トレンチ西壁環濠埋土堆積状況	31
写真35 筒井城跡第3次調査検出の井戸	35
写真36 同調査区全景	35
写真37 稗田環濠の遠景	45
写真38 集落北西隅にある常夜燈	46
写真39 天井町の家並み	46
写真40 集落北東側の濠（1）	47
写真41 集落北東側の濠（2）	47

写真42 集落北側の濠	47
写真43 集落北側の濠	48
写真44 集落北西側の濠（1）	49
写真45 集落北西側の濠（2）	49
写真46 集落北東側の濠	51
写真47 集落北西隅の濠	51
写真48 集落北側の濠	51
写真49 集落西側の濠	51
写真50 昭和38年の番条	52
写真51 集落北側の濠	53
写真52 集落東側の濠	53
写真53 番条の家並み	53
写真54 集落北西側の濠	54
写真55 集落西側の濠	54
写真56 集落南東隅の濠	55
写真57 集落南東側の濠	55
写真58 集落西側の濠（1）	55
写真59 集落西側の濠（2）	55
写真60 濠で遊ぶ子供たち	56
写真61 集落北側の状況	57
写真62 集落北東側の濠	57
写真63 集落東側の濠	57
写真64 昭和38年の筒井城跡ステレオ写真	58
写真65 菅田比売神社	59
写真66 神社東側の濠	59
写真67 集落北側の濠（1）	59
写真68 集落北側の濠（2）	59

I 稲田環濠の歴史と現代

1. 環濠集落とはなにか

人類の長い歴史のうちに、数限りない戦が繰り広げられた。人はその中で自らの身を守るために鎧を纏い、己の家族と財産を守るため、そして自身の生活の場である村を守るために、村の周りに堀を築き濠を巡らせた。洋の東西を問わず、都市や集落にはこのような施設が常に設けられ、それらは人間の戦いの歴史を今に伝える貴重な証人であると言える。

日本にも、戦乱の時代はかつて幾度も存在した。古くは紀元2世紀頃、中国の史書に「倭國大亂」と記された時代があった。弥生時代と呼ばれるこの頃の集落を発掘すると、集落のまわりに濠の巡らされていることがある。

この「倭國大亂」の約1100年のち、再び大乱の時代、戦国時代を迎える。人々は再び、村の周りに濠を掘り、村を守ろうとした。

やがて時は流れ、平和がおとずれ、濠を造った人々の願いは忘れ去られてが、濠はそのままとり残されて、村と田畠の景観のなかにすっかりとけこんで、まるで自然にそこにあったような気がする。現在でも奈良盆地の集落のあちらこちらに見られる環濠とは、この戦国時代に村を守るために掘られたものの名残なのである。環濠はその防御的使命を終えた後、あるものは残って田に水を引くために利用され、あるものは埋められその痕跡を区別に残し、あるものはその存在を完全に消し去った。それらの、今に残る姿にかつての環濠の姿を読み取ることができる。



写真1 稲田環濠に架かる橋(1)



写真2 稲田環濠に架かる橋(2)



図1 撮影場所(1)

奈良盆地の古い集落を訪れると、いまでも環濠の内側には土居の残っているところがあり、そこは竹やぶになっていることが多い。この竹は、戦いの時に竹槍や弓矢として使用された。集落内の道は狭く（これは現代人がそう感じるだけだろうか）、屈曲が多くて見通しが効かないうえに枝道は袋小路となっていて、初めて訪れるものは迷子になりそうで心細さを感じる。これは侵入者に対する自衛のための工夫である。また、稗田のように四方の環濠がすべて残っているようなところでは、現在でも集落に入る道は少なく、環濠の架かる橋も、昔は木橋や跳ね上げ橋で容易に外との交通を遮断することができた。集落内の神社や寺は戦いの際の主郭となり、そこにはさらに環濠を巡らすことであった。

普段、何気なく見ていると景観の中に溶け込んでいる風景も、よく観察すると中世の面影がそこかしこに残っているのである。しかし、そのようなものであるからこそ、近年の都市化の波の中で、しだいに消えて行っていることを感じられないのかもしれない。

（参考）奈良市・奈良町・大字

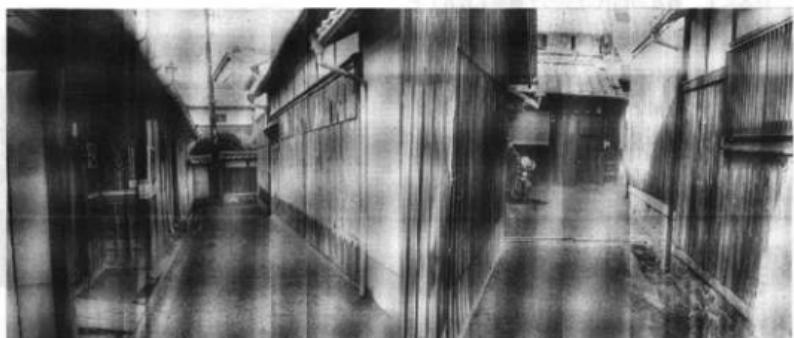


写真3 見通しの悪い道

写真4 袋小路



写真5 環濠内側の土居と竹藪

図2 撮影場所(2)

2. 稲田環濠集落の今昔

稲田環濠集落とその周辺の地域には、歴史の跡を今に伝えるさまざまなもののが残されている。稲田・若槻遺跡は稲田と若槻環濠を含むかなり広域に広がる遺跡であるが、過去数次の発掘調査で縄文時代晚期に、すでに人の住始めた痕跡が見つかっており、それに続き弥生時代中期、古墳時代の遺構、遺物が確認されている。奈良時代には、平城京朱雀大路より南下する下ノ道が、稲田環濠の西端を通るようになる。また稲田集落には、古事記編纂にかかわる語り部として著名な稲田阿礼を祭る式内社である、売太神社が所在する。発掘調査でも、この時代の人工河川や橋梁の跡などがみつかっている。

稲田集落との関係の深い、広大寺池は文治二年（1189）の『大和池田荘丸帳』に見える「細井池」であり、延久二年（1070）の記録によると、この頃は池の南半分は水田であった。広大寺池の水利権に稲田集落が大きく関与していることには、この時期の池の開削に、稲田荘が深くかかわっていたことを示すようである。もちろん、そのころはまだ、今のような集落は存在しなかっただろう。

稲田の集落が現在のような姿になり、また、環濠の掘削がいつ頃のことかは、定かではない。稲田集落の存在を示す最も古い史料は、『経覚私要抄』の文安元年（1444）二月の記事で、古市胤仙が稲田の陣を敷いたという記載である。このあと『大乗院雜事記』の文明十一年（1479）、文明十四年（1482）の記事にはそれぞれ、稲田が筒井氏の攻撃によって焼かれたことが知られる。このように稲田の集落は戦国時代には城砦的な役割を果し、またそのことによっ



写真6 売太神社



写真7 常楽寺

て大きな痛手を被ったのである。

稗田環濠集落は、構造的には一重の濠が集落のまわり巡る、最も一般的なものであるが、売太神社の西側にはごく最近まで枝濠が存在した。他に枝濠の存在を示す史料は見られないが、恐らく神社を主郭とした構造だったと考えられる。また、集落中央には融通念仏宗常楽寺があり、縁起によると永和二年（1376）創建とされ、現在のような集落の形成された時期を考えるのに貴重な手掛かりを与えるとともに、砦としての機能の中で重要な位置を占めていたことがうかがえる。

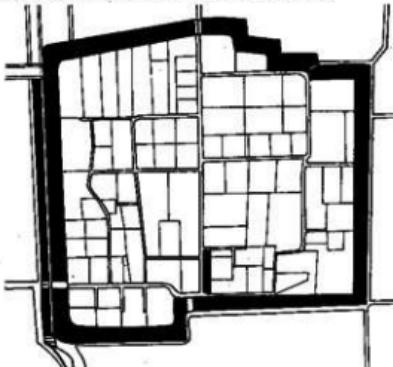
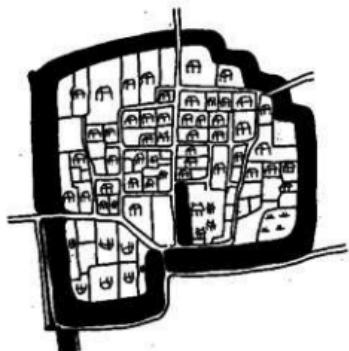


図3 江戸時代の稗田環濠(1)

図4 江戸時代の稗田環濠(2)



図5 明治時代の稗田周辺 (S: 1/20,000)

集落内の道割りは、近世の古地図と比べてもほとんど変わりなく昔の姿をとどめているが、集落南端を東西に貫く道は、かつては、現在亮太神社境内地となっている集落南東隅を北へ折れていた。従って集落に架かる橋も現在の亮太橋を除く4カ所であった。

このように見てみると、現在の稗田環濠集落の姿は古地図に見られるものと、それほどの変化は

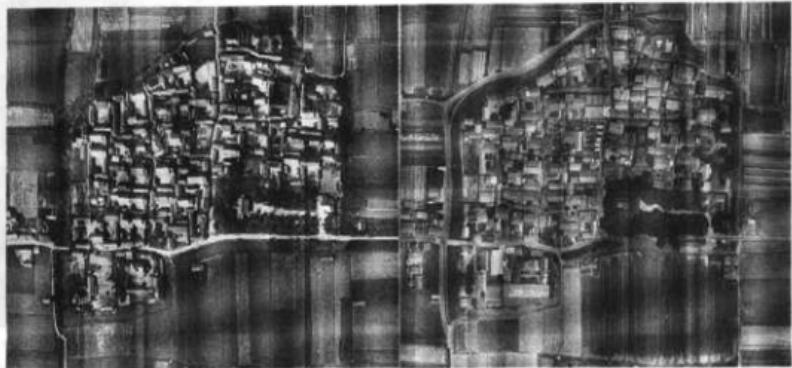


写真8 昭和38年の稗田環濠集落

写真9 平成2年の稗田環濠集落



図6 現在の稗田周辺 (S: 1/20,000)

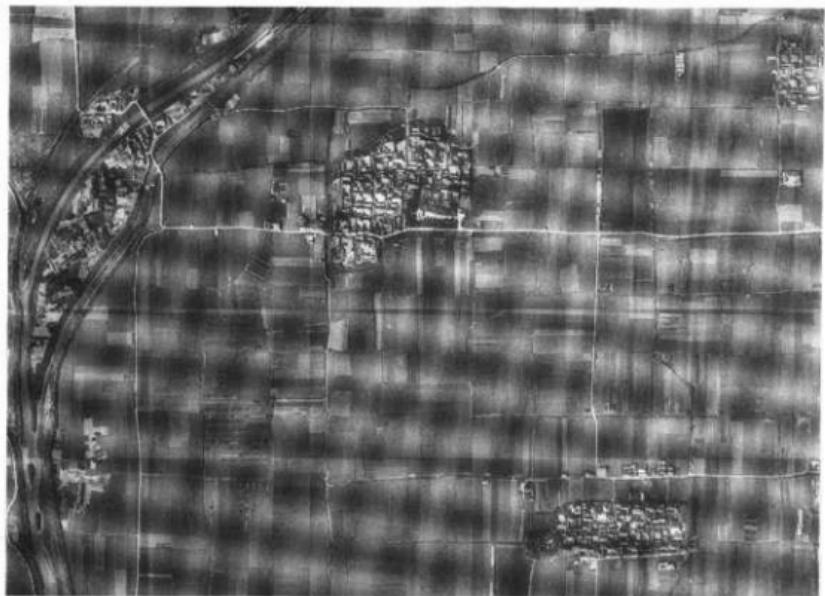


写真10 昭和38年の稗田とその周辺（上が北、右下は若槻環濠集落）

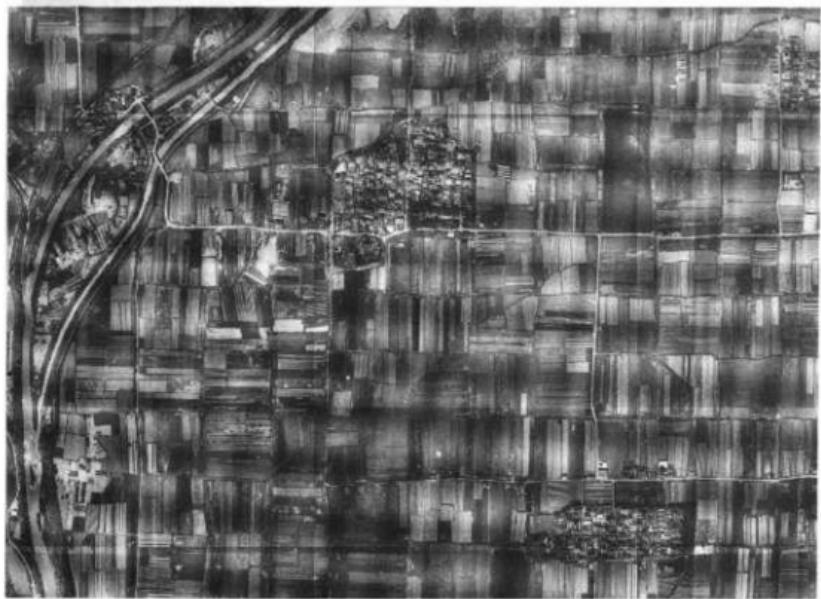


写真11 昭和44年の稗田とその周辺（集落北側で造成工事が始まった）

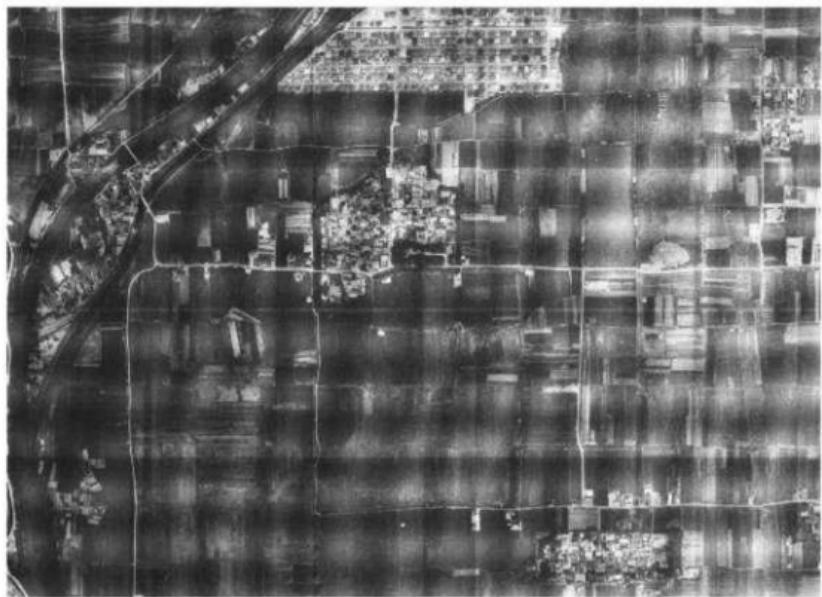


写真12 昭和48年の神田とその周辺（集落南側でも造成が始まる）

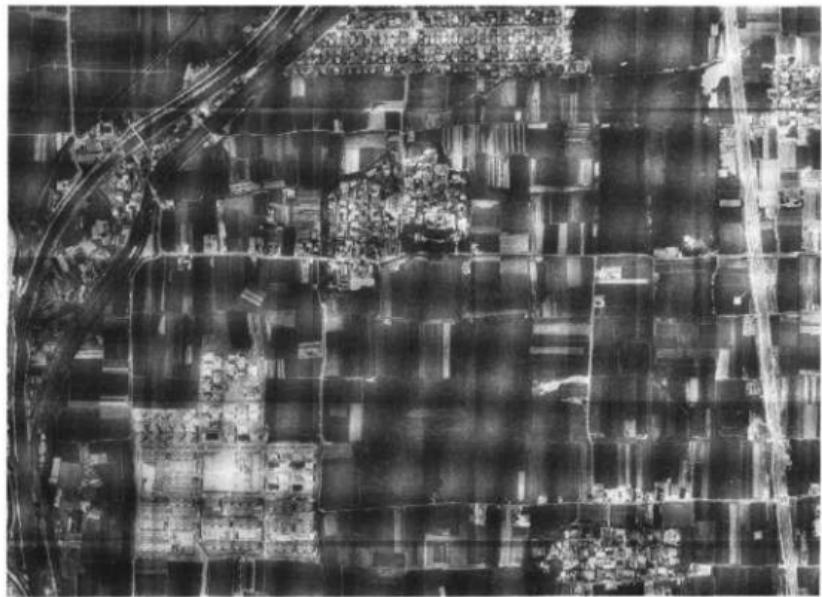


写真13 昭和55年の神田とその周辺（新24号線ができる）

見られない。また1963年撮影の航空写真と1990年のそれを比較しても、集落内については恐らく目に見える変化はほとんどないであろう。しかしながら、稗田環濠集落をとりまく周辺の景観の変化は驚くべきものがある。ここに1963年から1990年までの5枚の航空写真を掲げたが、この高度経済成長期から現在まで奈良盆地の田園が如何に消え去り、それに変わって道路が整備され、その道路の周辺には住宅地が、また、大型店舗がつぎつぎと造られていったことが、一日のもとに明らかである。稗田の集落を歩いていると、まだまだなつかしい風景を目にすることができる、あるいはそれが中世や近世の風景であるのかもしれない。

しかし集落を出て、ほんの1、2分も歩くとそこは車の行き交う幹線道路である。車社会と呼ばれるようになって、もうずいぶん久しく、この言葉もそろそろ死語となろうとしている。それだけ今の生活に車は、なくてはならない存在ではある。が、いつも車で通り過ぎてしまっている、このような懐かしい景色を1度ゆっくり歩いてみてはどうだろうか。そしてこの辺でそろそろこうした風景を残していくことを考えてはどうだろうか。

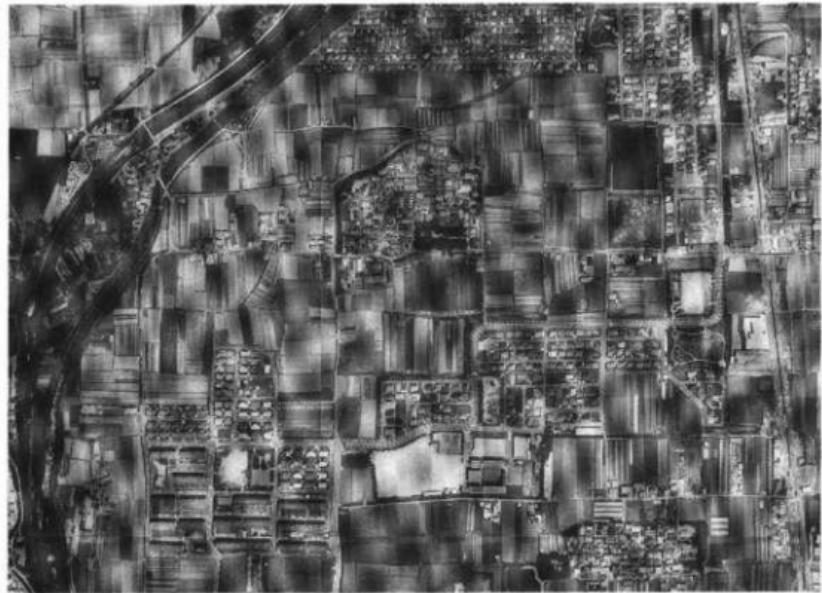


写真14 平成2年の稗田とその周辺

3. 稲田環濠集落の研究史

稲田環濠集落は、環濠集落研究の当初より注目されてきた。環濠集落の研究は小川琢治氏が『人文地理研究』(1928年)のなかで、「稲田村のごとく明瞭な溝を繞らしたものは必ずしも図上には見いだされないが（中略）単に現形から命名すれば市街式村落 Town-like Village と呼ぶべく、その起源が条里の設定に伴ったとすれば条里式村落と呼ぶべきかも知れぬ」と述べ、いわゆる「垣内式集落」が条里制に基づく村落形態として位置付けたことより始まる。この小川氏の研究のなかで、稲田は環濠集落の典型として喧伝されることとなる。なお引用文のなかで「稲田村のごとく明瞭な溝を繞らしたものは必ずしも図上には見いだされないが」とあるのは、当時の1/20,000の地形図(図5参照)には稲田の環濠が明瞭に記入されていたことを指している。

続いて、牧野信之助氏が「散居制と環濠聚落」(『歴史と地理』27-1・2・3 1938年 文献29)のなかで、稲田環濠をはじめとする大和の環濠集落を取り上げた。氏はここで稲田環濠を次のように紹介している。「この種部落中の代表的なものとして、學者間に衆知せられてゐる稲田(添上郡平和村大字)にあっては、圖示の如き形状の下に、幅員最も廣きところでは十間にも達する巨濠を残してゐる。殊にこの稲田の渠濠につき注意を逸してならない點は、街衢中の南面中央部に接して樹叢に覆はれ、梢々丘陵地をなしてゐる氏神の境内地に、環濠とは別に北方へ一枝濠を有してゐることである。之は、恐らくこの部落全體を一拒守地とした場合に神社境内を本丸とし本丸を支持する爲めの濠としてこゝに掘鑿せられたものと解せられるものである。斯くて稲田の渠濠は、恐らく部落民の自衛的工營に係るものと考



写真15 稲田の家並み(1)



写真16 稲田の家並み(2)



写真17 稲田の家並み(3)



写真18 稲田の家並み(4)



撮影場所(3)

察せられるのである。」このよう
に氏は、環濠集落の機能を防御に
あると規定し、また、その起源を
中世にあることを明らかにした。

戦後になって堀部（秋山）日出
男氏は「大和環濠聚落の史的研究」
(文献28)において「小川博士以
来最も典型的な環濠垣内として、
学界に喧伝せられつゝある稗田聚
落に於ては、その南面東半濠及び
西面濠はC型の所例（環濠の内側
線が条里制の坪の境界と一致する
もの。筆者註）に属するもので
ある。特に西面濠に於てはその南
方より北上し濠の為に殊更西偏さ
せられた道路は、これこそ飛鳥時
代以来大和平野を南北に縦貫官道
たるいわゆる下津道であって、
(中略)故に当時は可成りの幅員
を有した道路であったにもかゝわ
らず、稗田聚落の環濠はこの道路
を弯曲させた、換言すれば古代の
官道たる下津道の敷地を濠として
いるのである。」とし、稗田の環
濠の掘削年代を不明としながらも
平城京廃都後かなり後のこととし
ている。

以上のように、環濠集落研究の
初期的段階より現在にいたるまで、
稗田環濠聚落はその研究資料とし
て重要な位置を占めてきたのであ
る。

II 稲田環濠の発掘

1. 発掘に至る経緯及び調査概要

大和郡山市指定文化財である稲田環濠でも、他の環濠と同様にヘドロの堆積が進み、水草が繁茂し、害虫の発生や悪臭などが地域住民に中で問題となっている。これに対し市土木課では環濠の北西側、西側について護岸を主とする整備を行ったが、今回あらたに特定保水事業として、環濠の整備と活用を図るべく計画の一環として、環濠の旧状をとどめる未整備部分の東北側、東側、南側について、濠の幅を確認を目的とする発掘調査を行った。

調査期間は平成4年3月9日より3月31日であったが、例年ない春の長雨による天候不順の日が続きまた、諸種の事情から調査を中断せねばならないことがあり、実質に発掘作業が行えたのはおよそ1週間ほどであった。

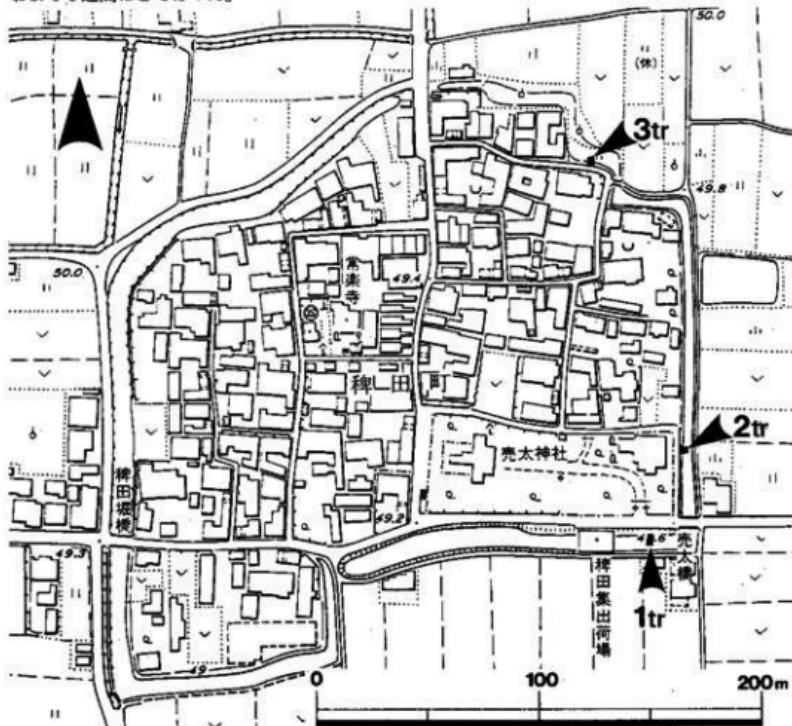


図8 トレンチ配置図 (S : 1 / 2,500)

2. 調査方法

調査は、環濠東側の三方向にそれぞれ一ヶ所ずつ、濠に直交する方向に4m、平行方向に2mの大きさのトレンチを設けて実施した。トレンチは掘削順に南側の濠のものを第1トレンチ、東側のものを第2トレンチ、七曲がりのものを第3トレンチと命名した。

濠内には常に水があり、矢板を打ちこみ水の浸入を防いだが、ヘドロの堆積が厚く、約1mにもおよぶため、その重量で矢板が湾曲するほどであった。また、掘削中に絶えず涌水や矢板より浸入する水に悩まされ、トレンチ内の作業は困難を極めた。掘削はバックホーを使用したが、配置できるところが道路沿い部分であったため、十分な余地を取ることができず、肩の部分まで掘削することができなかった。また、しばしば人車の通行を妨げたり、道幅の狭いところでは旋回半径が限られることから、小型のバックホーを使用せねばならないところもあり、地域住民の方々には多大な御迷惑をおかけしたとともに、本来の目的である濠の幅を確認することも十分に果せなかつた。このように困難かつ危険な作業であったため、調査は濠の土層断面図の作成を主目的とし、濠の深度の確認と、各土層に含まれる遺物の探索から堆積年代の同定に務めた。しかし、遺物の包含量が極めて少ないうえ、人力による掘削が不可能であったため、期待した成果を上げることができなかつた。



写真19 作業風景

3. 調査結果

1) 第1トレンチ

南面環濠の東端、売太神社の道を隔てた南に設定した。トレンチの規模は、東西約2m、南北約4mである。

ヘドロを除去し、以下約1m下まで掘削したところで土圧により矢板が湾曲したため、掘削を中止し、掘削部分の土層図を作成した。

掘削の結果、4つの土層の存在を確認した。層序は上から灰色粘土層、灰褐色粘土層、灰色砂礫混粘土層、灰緑色粘土層である。遺物は灰色粘土層より土師器片が1点出土している。

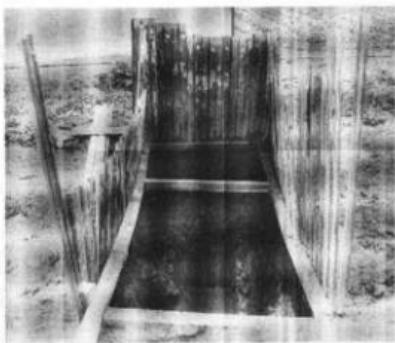


写真20 第1トレンチ全景

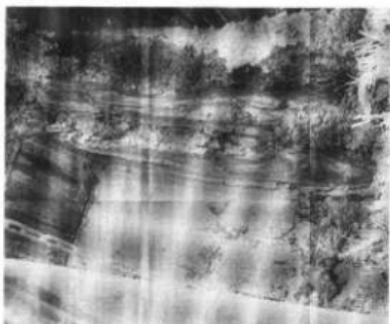


写真21 第1トレンチ掘削状況

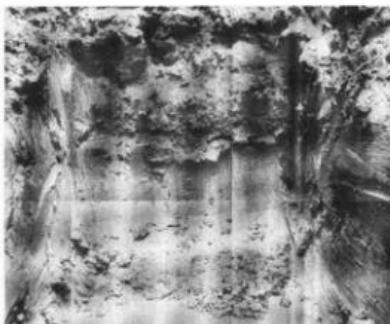


写真22 第1トレンチ北壁

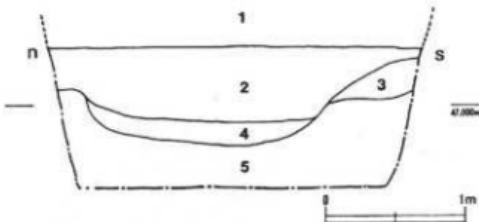


図9 第1トレンチ東壁土層図 (S: 1/40)

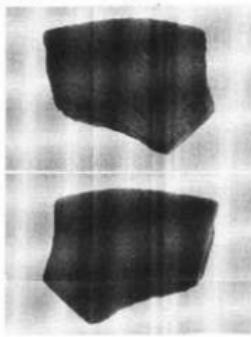
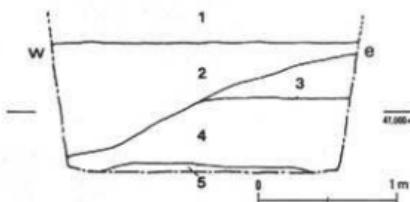


写真23 第1トレンチ出土遺物



写真24 第2トレンチ調査風景



1. ヘドロ層 2. 淡灰褐色粘土層 3. 淡灰色粘土層
4. 灰色粘土層 5. 灰白色細砂層

図10 第2トレンチ北壁土層図 (S : 1/40)

2) 第2トレンチ

第2トレンチは東面環濠の南側、壳太神社北辺を東に延長した位置に、東西約3m、南北約2mで設定した。

ヘドロを除去した後、約90cm下まで掘削を行ったが、涌水が激しく、以下の掘削は断念した。

掘削部分では、4つの土層の堆積を確認した。上から、淡灰褐色粘土層、淡灰色粘土層、灰白色粘土層、灰白色細砂層である。

出土遺物は6点で内容は、瓦片2点、青磁片1点、土師器片3点であった。瓦のうち1点は布目痕をもつ丸瓦片で布の縫目跡が認められる。

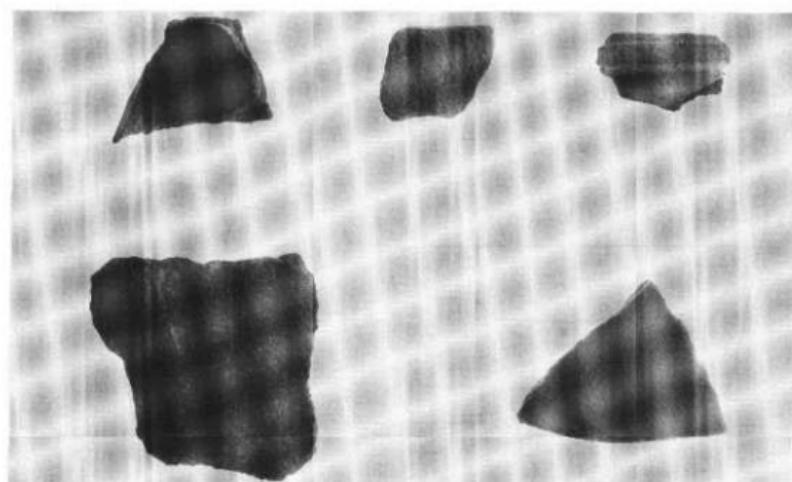


図25 第2トレンチ出土遺物 (左上・左下: 瓦、中上・右上: 土師質土器、右下: 青磁)

3) 第3トレンチ

トレンチは東西約1m、南北約2mの大きさで設定した。表層より約1m下までは盛土で、その下に4つの層を確認した。

灰色粘土層は濠埋土として堆積し、直下の灰色砂質土層は、同じく埋土ながら、一時期の肩部となっていたことも認められる。その下の暗灰色粘土層および、暗灰色砂質土層は南側に徐々に立ち上がり、濠の幅は集落側にも拡がることを裏付ける。ちなみに現在のこの部分の濠の幅は約2.5mである。

出土した遺物は土師器片、瓦片が各1点ずつである。



写真26 第3トレンチ設定場所

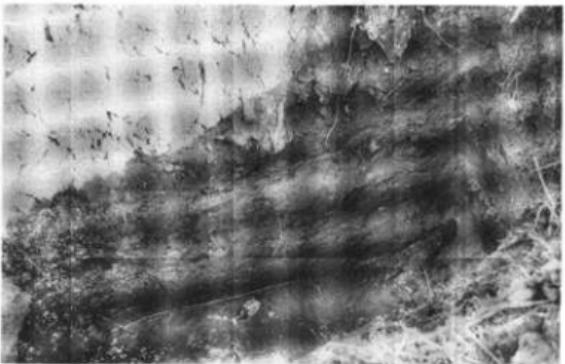
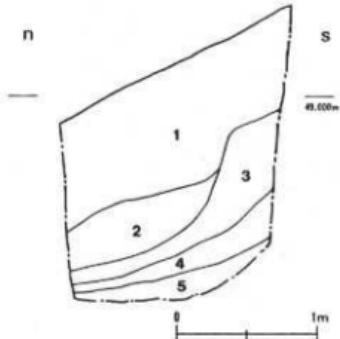


写真26 第3トレンチ掘削状況



1. 盛土層 2. 灰色粘土層 3. 灰色砂質土層
4. 暗灰色粘土層 5. 暗灰色砂質土層

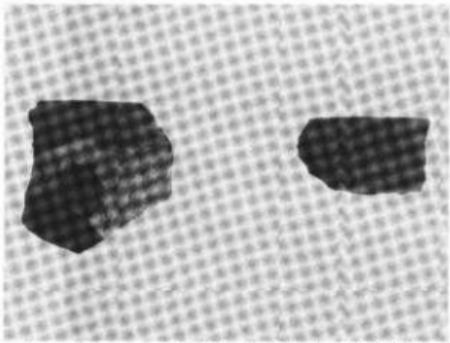


写真27 第3トレンチ出土遺物 (左: 瓦、右: 土師質土器)

図11 第3トレンチ東壁土層図 (S : 1/40)

4. まとめ

以上のように、期待した調査結果は得られなかったが、今後の調査課題として提示された問題点について述べてみたい。

濠は本来防御と灌漑をその主目的として機能してきた。従って、濠の底浚えは毎年あるいは数年に1度実施されていた。稗田環濠の場合、かなり最近（とは言っても約50年ほど前だが）まで利用されていたことから、濠内の遺物は発掘調査によって確認された環濠、つまり極めて早い時期に埋没した濠に比べるかに少ないのである。しかも消滅濠は最終的に人力で埋められることが多いことから、ごみ捨て場となり、埋設された年代は比較的容易に推定できるのである。稗田環濠で、最も重要な問題点はその開削された時期であり、濠内の最下層出土遺物の年代が問題となるだろう。しかし、先にも述べたように、濠内の遺物の包含量が極めて少ないとから、年代決定に困難が予想される。そこで今後の濠の調査においては、堤帶の断ち割りを行い、堤帶に含まれた遺物を年代決定材料に加えていく必要がある。

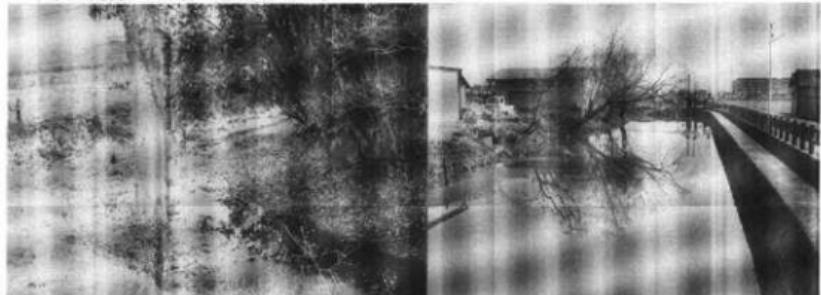


写真29 環濠の風景(1)



写真30 環濠の風景



写真31 環濠の風景(3)



図12 撮影場所(4)

III 奈良盆地の環濠集落

1. 地図に見る盆地内の環濠集落

環濠集落の研究は、そのほとんどが奈良盆地の環濠集落を調査対象としてきた。こうした状況のなかで、奈良盆地にはいったいどれだけの環濠集落が存在するか、あるいはかつて存在したかを検討した論考も数多い。いま手元にあるこれら先学の論考を見てみると、大和に存在する環濠集落の実態が理解されよう。奈良盆地の環濠集落の実数を最初に上げた堀井基一郎は当時の調査で環濠の存在する集落は84カ所としている（文献26）。また野村傳四氏は現地調査とともに古地図等を参考に、160カ所以上の環濠集落が存在したとしている（文献19）。戦後、奈良盆地の環濠集落の研究を行った堀部（秋山）日出夫氏は、184カ所を上げ、また、盆地内の環濠集落分布図を作成された（文献28）。これらの数と分布図は現在でも必ず引用されるものである。このあと、新たにその実数を示した研究は村田修三氏によるもので243カ所がある（文献31）。

このように奈良盆地の多くの集落に環濠が存在したのであるが、現存するものも含め著名なものを地図を参考にここで紹介しておく。



図13 奈良盆地の環濠集落分布図（文献31の環濠一覧より作成）

唐院環濠（川西町唐院）

磯城郡川西町、島の山古墳西側にある唐院町は、現在ではかなり大きな町となっているが、二重環濠の痕跡を残す中世の環濠集落である。

今は水田となっているが、字城の内には濠があげられ、ここがかつての環濠屋敷地であったことがわかる。現在は集落を東西に貫く道路沿いに宅地が広がり、付近の様子もかなり変化しているようだが、東西道をはさんで南半部と北西部に外濠の名残をとどめる。

『箕輪寺再興之縁起』によると、永享二年（1430）に筒井氏と箸尾氏との合戦で箸尾氏にくみし、唐院庄が焼き払われている。また、『大和園郷土記』には唐院山城の記載が見え、集落北東にひかえる島の山古墳をこもり城として活用したことが推定されている。（参考文献 10）



図14 唐院環濠（S：1/5,000、文献17より引用）

上窪田環濠（生駒郡安堵町窪田）

上窪田環濠は、二重濠複郭として典型的な形をとどめている環濠として著名である。これは単に環濠集落と呼ぶよりもむしろ、居館あるいは平城的色彩の濃い領主屋敷を中心とした集落というべきだろう。すなわち、二重の濠に囲まれた北側の区画を領主屋敷（環濠屋敷）、その南側の部分が濠に囲まれた集落部分となる。

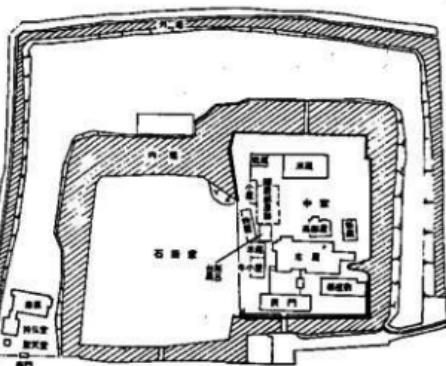


図15 環濠屋敷平面図（文献1より引用）

在地領主の存在を明確に示した典型的な環濠集落と言えよう。（参考文献 1、10、19）



図16 上窪田環濠 (S: 1/2,500)

伴堂環流（磯城郡三宅町）

環濠集落も有力領主の居住地となると、かなり複雑な構造をもつようになる。伴堂環濠集落もそうしたもののひとつである。環濠の形態は、南北に長い長方形で北西と南東にやや張り出す濠を巡らせている。環濠内は五つの垣内からなり、かつてはそれぞれの垣内を区画する枝濠も存在した。

中世の伴堂については、『続南行雜錄』に永祿五年（1562）伴堂、金剛寺両城が破却されたことが記載され、また、『多聞院日記』や『國民郷土記』にも伴堂城の記載がある。

なお、伴堂氏は筒井氏に属していた。(参考文献 29)

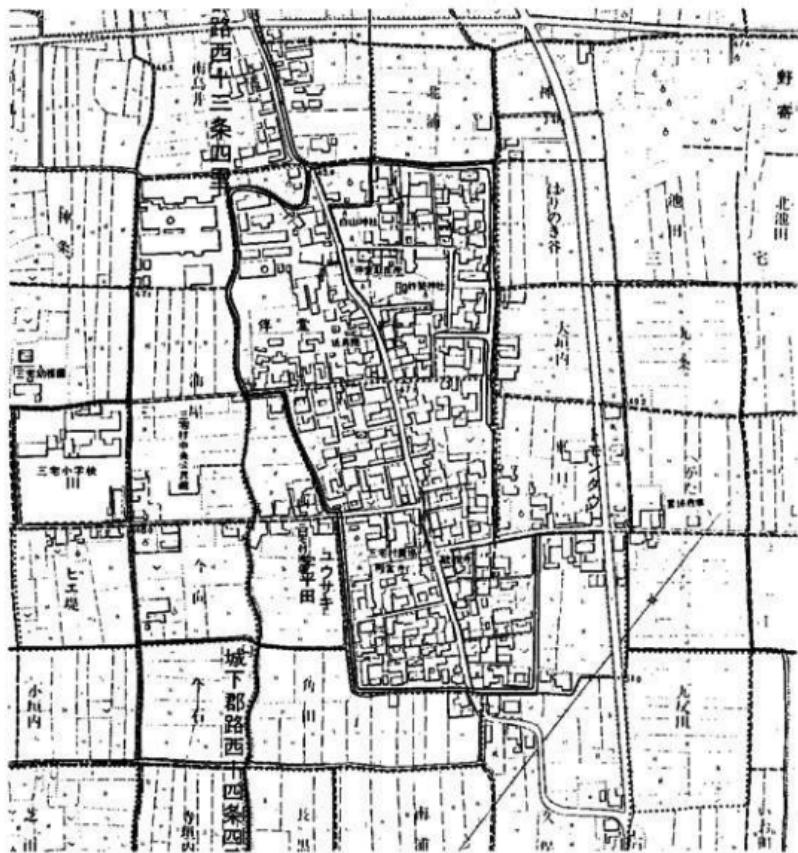


図17 伴堂瓊藻（S: 1／5,000文献17より引用）

備前環濠（天理市備前）

備前環濠は現在、その濠はほとんど消滅してしまったが、近世における環濠集落の変遷過程を知るうえで貴重な資料である。江戸時代の地図3枚が残されている。約50年ごとに作成されたこれらの地図から、集落内の枝濠がこの150年の間に、かなり頻繁に開削、あるいは埋設されていることがわかるのである。

(参考文献 14)



図18 備前環濠 (S : 1 / 5,000文献17より引用)



享保四年 (1719)



宝曆十二年 (1762) 西堀・新堀を開削



文政九年 (1826) 西堀新堀がつながる



昭和五十年 (1975) 西堀新堀が残る

図19 備前環濠の変遷 (文献14より引用)

保津櫻臺（豊城郡田原本町保津）

保津環濠は、稗田環濠とともに最も整った環濠を今に残す典型的な環濠集落である。現在の戸数は約40戸で稗田に比べ約半数である。そのうち25戸が環濠の中にある。完存する四周の環濠に二町四方の正方形に近い形で、南に神社（式内社：鏡作伊多神社）が突き出す。元禄十七年（1704）の古地図を見ると、現在の環濠とそれほど差のないことがわかる。さらに、この地図によると、集落への入り口は集落の北を通る街道筋ではなく、集落の南側と西側のあったことが指摘されている。しかも、この西側の橋は、幅約30cmの板橋で、人ひとりやっと通ることのできるものであったらしく、本来の入り口は南側だけであった。

なお、この集落には宝曆四年（1754）におこなわれた堀渡えの資料が残されている。この資料によると、堀渡えには4日間が費され、約368人の人々が、作業に参加している。これらの作業は、平野藩の役人の指揮のもとにおこなわれ、作業に従事した人々も、藩内の各村々より集められている。ちなみにこの堀渡えに参加した村は、薬王寺・十六面・竹田・南方・佐味・飯高・万田・秦樂寺・九品寺・依本・保津の11ヶ村であった。この資料は奈良盆地における、近世村落史を研究する



図20 保津環濠（S：1/5,000文献17より引用）

うえで、たいへん貴重なものである。

また、保津環濠集落の東側には小字名中垣内と呼ばれる場所があり、ここの地割りは他の耕作地が条里制の坪割に沿っているのに対し、大きく異なっている。伝承によると保津の集落はかつてはこの地にあり、穂積千軒とよばれていたということである。(参考文献 19、25、26、27、31)

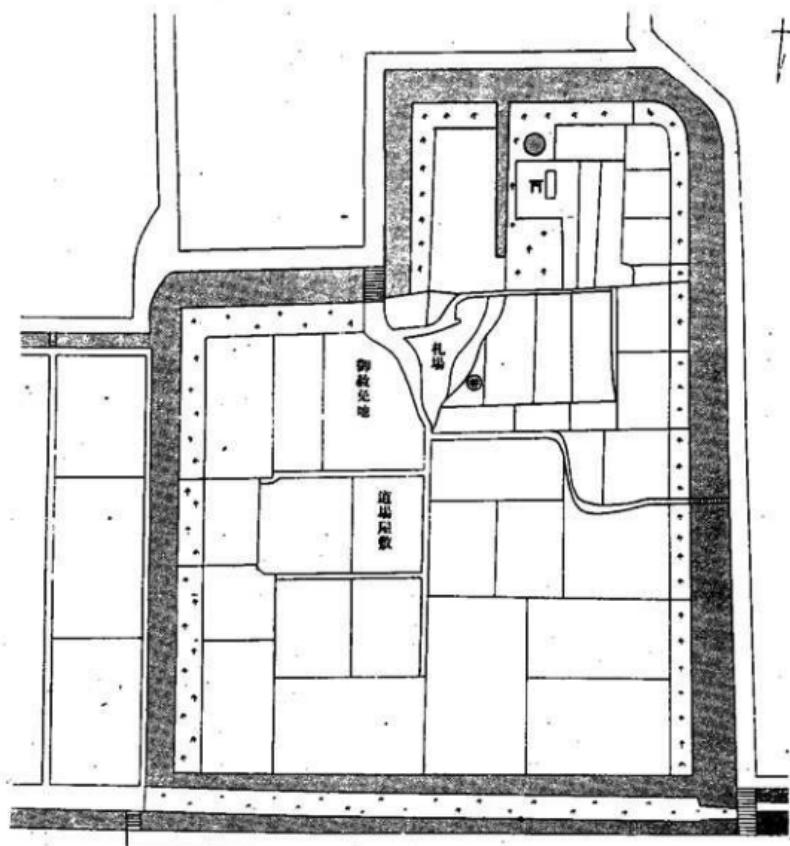


図21 元禄十七年(1764)の保津環濠(文献19より引用)

北阪手環藻（磯城郡田原本町）

北阪手の集落は、寺川の東岸に所在し、東西約320m、南北約90mの長方形の環濠をもつ集落である。

濠は一部暗渠となっているが現在でも四周を巡り、特に南側の濠は幅が広く、この南側の濠だけで6本もの橋がかかっている。また、南側の濠内側には受堤と呼ばれる土壁があり、普段は通行のできるよう切り通しとなっているが、この切り通しの両側には、洪水時に水を食い止める板をはめこむ石柱を立て、せきの役割をはたしていた。現在でも6カ所にせきの跡が残されている。この受堤の内側にも細い濠が走る。

田原本は奈良盆地でも最も標高の低いところであり、洪水の被害の多い場所であるが、北阪手の集落では、このあたりは南側が最も低くなってしまっており、大水の時の浸水を防ぐためこのような防御施設を設けているのである。

集落内には東西に1本の道が通り、この道を幹にして南北にそれぞれ枝道が出ている点、同じ長方形の環濠をもつ若櫻の環濠集落と同様の道割である。(参考文献 25)

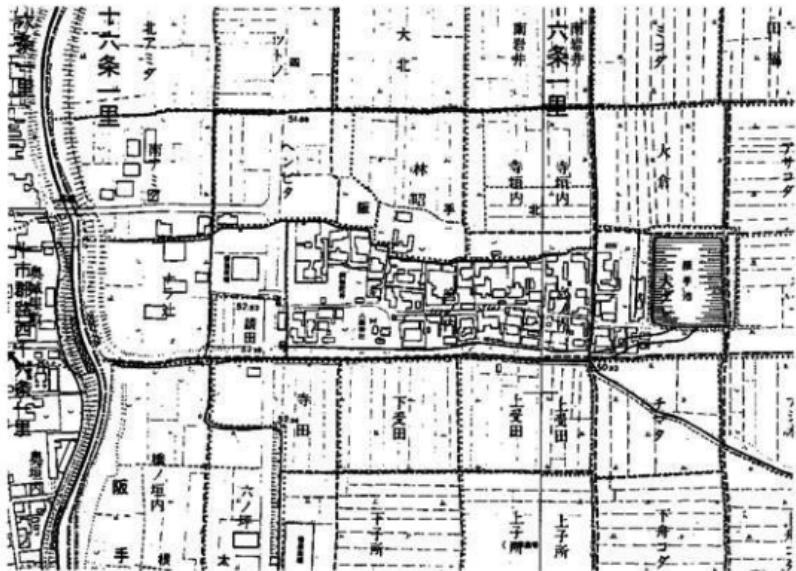


図22 北阪手環濠（S：1／5,000文献17より引用）

今井環濠（福原市今井町）

今井町は、いまさら解説するまでもないほど著名な寺内町であるが、ここでは一般的な環濠集落との比較に注目して解説してみたい。

今井町は東西に長い長方形を成し、現在の戸数は約800戸、一般的な環濠集落、例えば稗田環濠集落では約80戸程度であることと比較すると約10倍の規模となる。また、環濠の大きさでは東西約600m、南北約300mで、同じく一般的な環濠集落で長方形の環濠をもつ若槻環濠集落と比較して面積で約8倍の大きさとなる。

集落内の道は延宝七年（1679）から元禄二年（1689）の間に描かれたとされている今井町古図によると、環濠の内側に沿って今井町を巡る道を除いて他は、かつてのものを踏襲しており、一般的な環濠集落のように遠方遮断や屈曲が多く取り入れられているものの、基盤目状に通り、計画的な町割りが行われていたことがわかる。

史料から中世の今井町のようすを窺うと「四町四方ニ堀ヲ掘リ廻シ、土手ヲ築キ」との記載がありまた、本願寺が織田信長に降伏した際、「矢倉等ヲロサセ」たと記されており、堺環濠都市に見られるような防御施設を備えた城郭都市であったようである。なおこの時期の「四町四方」は現在の町より狭く、その後東側に新町が作られ今の姿となった。その当時のようすは部分的に残る環濠と、春日神社の西の土塁に面影をとどめる。（参考文献 7、28、31）

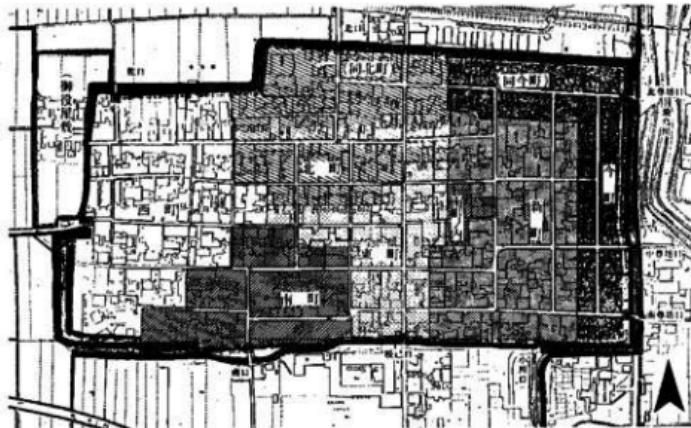


図23 江戸時代の今井環濠（文献7より引用）

南郷環濠（広陵町南郷）

南郷環濠も箸尾環濠に並ぶ奈良盆地内では最大規模の環濠（東西550m、南北700m）である。環濠内には現在2つの集落があり、また、南東隅には内環濠に囲まれた字「城ノ内」と呼ばれる区画が領主屋敷地跡と推定されている。この環濠は国人南郷氏の居城と考えられているが、南郷氏の動向についてはよくわからない。

南郷環濠集落のように有力領主の居住地として大規模な環濠をもつものに、先に上げた伴堂環濠集落とこの南郷の環濠集落、広陵町の箸尾集落、そして後述する大和郡山市の番条城、筒井城などがあるが、このうち筒井城を除く4つの環濠集落はそれぞれ南北に長い集落となっており、また、その領主館は集落の南端か北端に位置している。これは集落形成時に計画的な町割を行ったのでは

なく、その勢力の伸長と共に、周辺の集落を吸収合併させる形で集落地を拡大させた結果ではないかと考えられる。これらの集落は戦国時代の城下町としてその領主とともに発展していくのであるが、やがて大和が筒井氏によって統一され、戦国の時代が終わりを告げようとする時、これらの城下町の賑わいも止まり、やがてもとの集落にかえっていったのである。（参考文献 19、28、31）

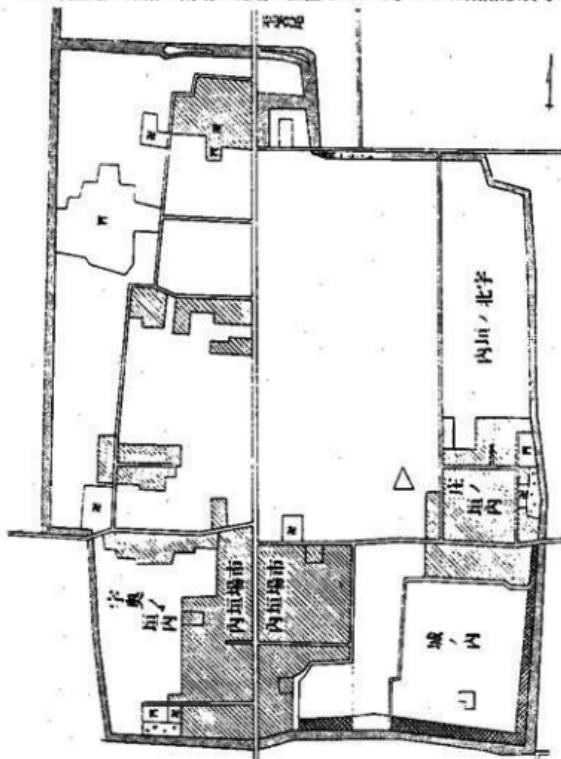


図24 昭和初期の南郷環濠（文献19より引用）

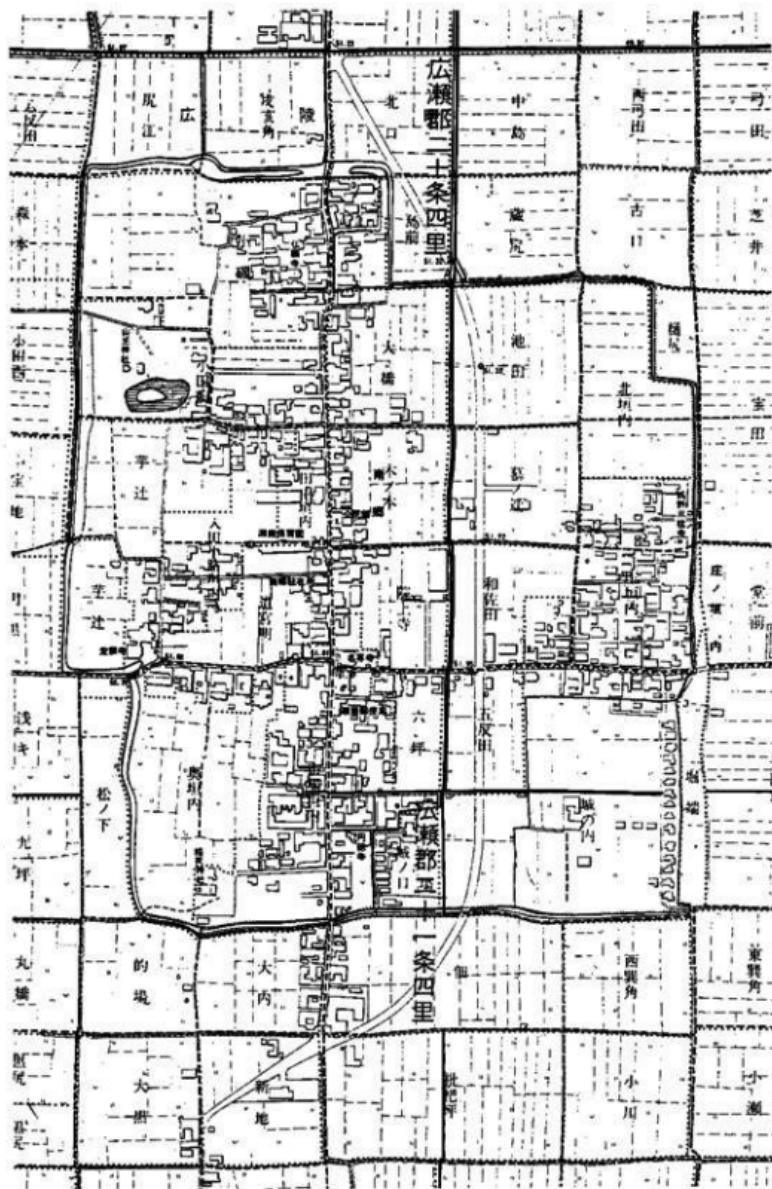


図25 南郷環濠 (S: 1/5,000文献17より引用)

この項では、現在も昔のまま残されている、著名な環濠集落について取り上げた。奈良盆地の各地に、このような環濠集落が存在し、また、その形態にもいろいろなものがあることが理解されたと思う。環濠の形態については堀部（秋山）日出男の分析があり（文献）ここに取り上げた集落をこの分類にあてはめると以下のようになる。

環濠集落	分類		該当する集落
	環濠垣内	環濠屋敷	唐院・上森田
		環濠の村落	備前・保津・上阪手
	寺内町	今井	
	城下町	伴堂・南郷	

ただ、堀部氏の分類と筆者の区分とは若干意味合いが異なる部分があり、この点については、いづれ再論するつもりである。

2. 掘り出された環濠集落

近年、中近世の考古学が注目されてきた。奈良県でも中世の集落跡や城郭、墓地などの調査例が以前に比べかなり増加してきている。また、中・近世の発掘資料の増加とともに、この時代の研究が活発に行われるようになっている。

こうした状況は、中近世史のあらゆる分野において少なからぬ影響を与えている。環濠集落についても、過去に埋没してしまったものが発掘される例も数多い。そして、それまで現存する環濠や、地表面に残された痕跡、また、古地図などによって推定復元されていたものも、地下に埋もれた環濠の検出によって、より確かのものとして復元されることになった。これは単に、濠の復元に止まらず、中世環濠集落の復元、そして、そこに生活していた人々の復元をも可能にしている。それだけでなく、今までその存在すら知られていなかった、歴史の中に消えた村々の姿をも浮かび上がらせるのである。このように、発掘調査によって文献では知ることのできなかった事実をあきらかにし、中近世の歴史研究は新たな段階を迎えるようとしている。

この項では、そうした最近の研究成果を踏まえ、発掘調査によって明らかにされた知られざる環濠を紹介したい。

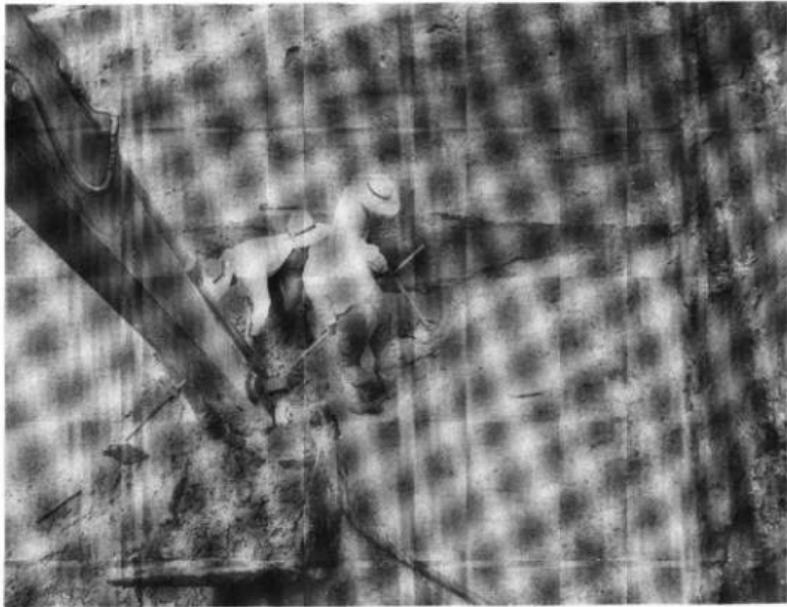


写真33 環濠を掘る

A. 古屋敷遺跡（大和郡山市満願寺町）

古屋敷遺跡は、大和郡山市西側、富雄川の東岸に所在する遺跡である。これまで3次の発掘調査が行われ、縄文時代後期・晚期の遺物や弥生時代の土壙、溝などが確認されている。

環濠と思われる溝は第2次、第3次調査の際、検出されている。この調査は大和中央道のバイパス道建設に伴うもので、道路予定地の北半分を権原考古学研究所が、南半分を大和郡山市教育委員会が調査を実施、権原考古学研究所調査地区を第2次、大和郡山市教育委員会調査地区を第3次調査としている。

溝はこの道路予定地に沿って検出された。検出された範囲は東西が約100mで、東端が北に屈曲していることが確認されている。溝の幅は調査地区外に溝が及ぶため、一部で確認されたに過ぎないが、確認された部分で約7mとなる。

溝内からは、土釜をはじめとして、陶磁器や壺、すり鉢、漆器などが出土している。また金泥を施した天正元年（1573）銘をもつ墓碑も出土している。これらの資料から、この溝の埋没年代は16世紀末から17世紀初頭であろうと考えられている。（参考文献 20）

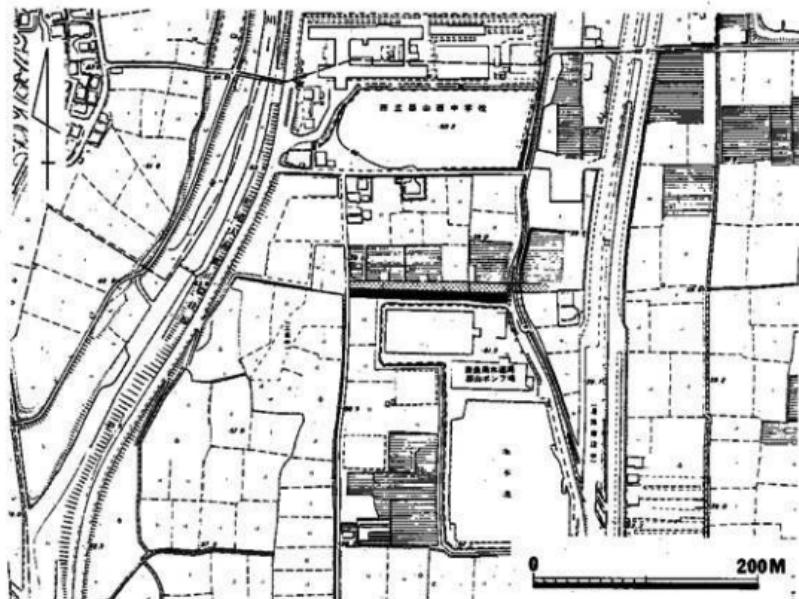


図26 古屋敷遺跡調査位置図（トーンは第2次、黒塗りは第3次調査地文献20より引用）



写真33 古屋敷遺跡第3次調査第4トレンチ検出の環濠

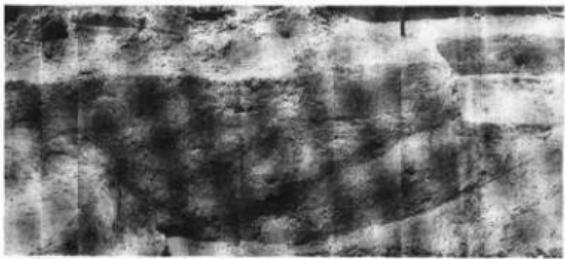


写真34 同第4トレンチ西壁跡埋土堆積状況

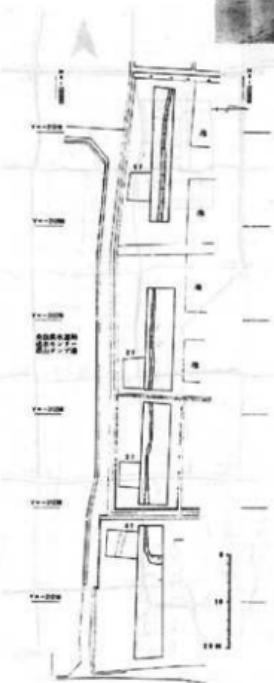


図27 古屋敷遺跡第2・3次調査トレンチ配置図（トーンは第2次白ヌキは第3次調査文献20より引用）

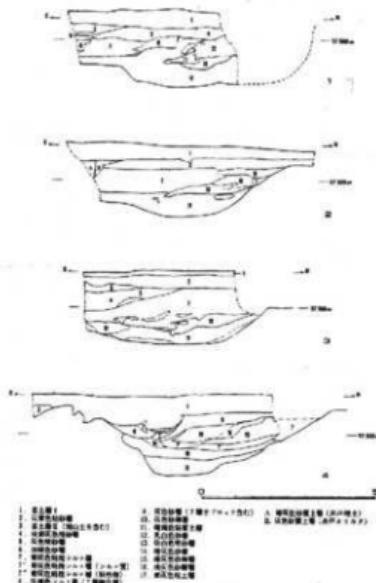


図28 第3次調査の各トレンチ断面図（文献20より引用）

B. 若槻庄関連遺跡第3次調査地（美濃庄遺跡範囲内、大和郡山市若槻町）

美濃庄遺跡は大和郡山市東半の佐保川の東、現在の美濃庄の集落を含む範囲に存在する遺跡で、西に隣接して稗田・若槻遺跡が存在する。調査報告では、若槻庄関連遺跡とされている。発掘調査は権原考古学研究所によって1981年に実施された。

検出された遺構は中世のものではコの字状の溝と建物跡、井戸、池などがあった。また、それ以前の奈良時代の川、古墳時代前期の溝なども検出されている。

環濠と推定されるコの字状の溝は幅約3m、南辺が約25m、西辺約45mで北辺は調査地区外にまで伸びている。区画内には4棟の建物跡と48基の井戸、池跡が存在した。また、区画外にも1棟の建物が検出されている。この区画内の建物のうち、最も規模の大きいものは、区画のほぼ中心にある桁行四間、梁行三間の東西棟、南西隅が鍵状に欠け、西端が東端より狭くなる。また、この建物の南東隅に付属する施設を取り付いている。この施設は、四隅を柱で支え、柱の間に杭状のものを数多く打ち込み、その床面は焼けていた。

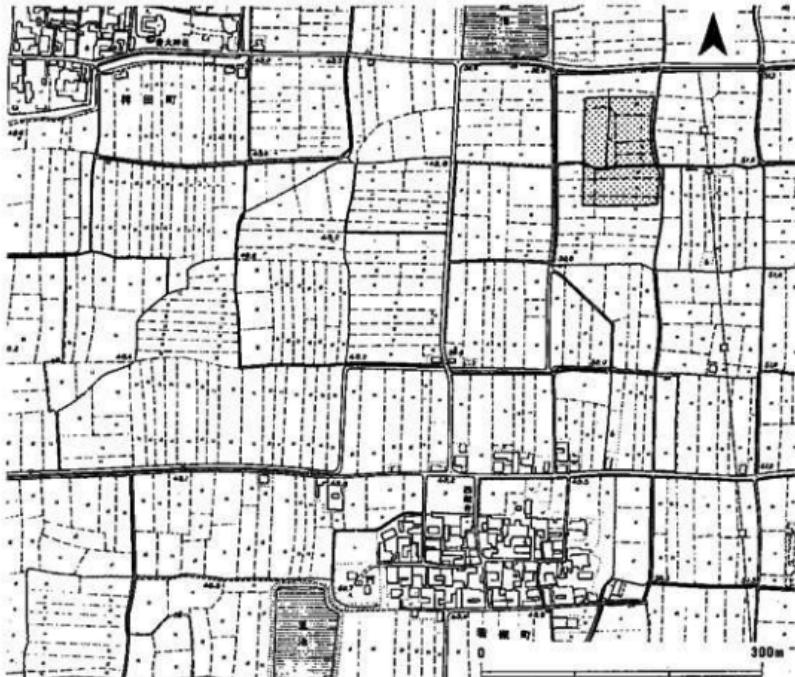


図29 若槻庄関連遺跡第3次調査位置図 (S : 1 / 5,000文献16より引用)

溝の埋土は3層に分けられ、上層は埋土、中層は地固めのための竹の切株を多く含む層、そして下層が自然堆積層である。遺物はこの下層より最も多く出土しており、土器・木器は西端のほぼ中央部に限られ、他からは、この溝に沿って植えられていた樹木の種子が出土している。また、鉱滓の出土も認められ、先に述べた主屋に付属する施設が工房のようなものであったとも考えられる。その反面、農耕具の出土は全く認められない。

若櫻庄については、数多くの文献資料が残されており、この方面からの研究により、環濠集落形成以前の散村・疎塊村の形態についてもかなり詳細に考証されている。それらの研究成果によると、この時期の名主層の宅地が一反とされている。しかし、今回検出された、溝に区画された屋敷地は2500m²と推定されており、2.5倍もの大きな隔たりがある。この点については、若櫻庄地域における今後の調査成果を待って、解決しなければならないだろう。(参考文献 2、6、16)

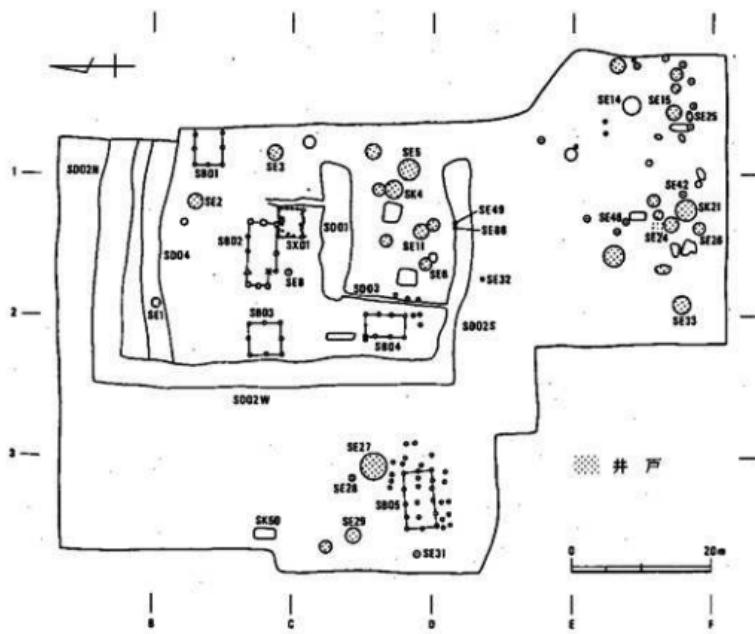


図30 若槻庄関連遺跡第3次調査検出遺構平面図（S：1/800文献16より引用）

C. 筒井城跡（大和郡山市筒井町）

筒井城跡では過去3度の発掘調査が実施されているが、それぞれの調査は面積的にもそれほど広くなく、筒井城の全体像を知るには至っていない。

第1次調査は権原考古学研究所が1982年に実施したもので、字名「シロ」と呼ばれる、城の中心部と推定されている部分である。この調査では筒井城に関連する建物の柱穴や井戸、溝が検出された。また、筒井城造営あるいは改造に伴う整地の行われた痕跡が認められた。この調査は、試掘であったため筒井城の全容をうかがい知るために調査面積があまりにも狭すぎた。しかし、この狭い面積にもかかわらず、かなりの遺構の検出を見たことは、この部分が城の中心部であった可能性の高さを示しているのである。

第2次調査以降は大和郡山市教育委員会によって実施されている。第2次調査は1988年に城の南東隅、字名「東門」地区で行われた。字名もあるとおり城の東側に位置し、かつて門であった地域とも考えられたが、城と直接関連する時代の遺構は検出されず、筒井城築城時期よりややさかの

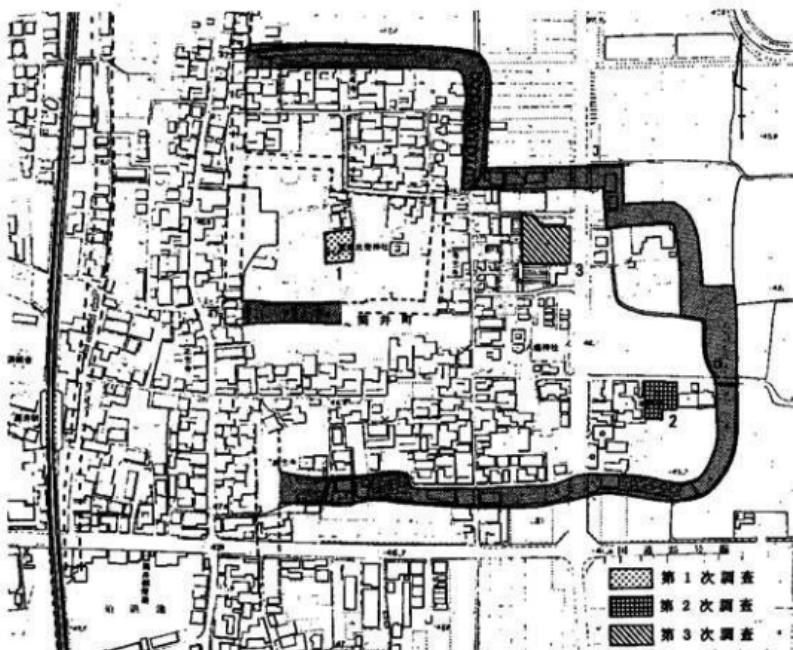


図31 筒井城跡調査位置図 (S: 1/5,000文献33より引用)

ばる14世紀を中心とした時期の井戸が17基も検出された。

第3次調査は1991年に、城の中央部から東にあたる字「森目」地区で実施された。この調査では井戸や土壌、ピット、溝などが検出された。井戸は筒井城の存在した時に使用されていたもので、上部の井戸枠は抜き取られ丁寧に埋め戻されていた。そのほかの遺構は、筒井城に関連する建物跡と思われるが、そのことを積極的に示す礎石などは認められず、筒井氏の郡山城移転に伴いこれらの建物も移築されたものと考えられている。(参考文献 3、30、31)

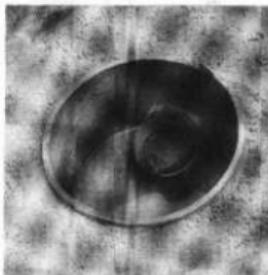


写真35 筒井城跡第3次調査検出の井戸

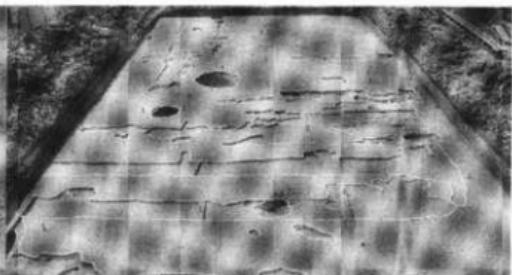


写真36 筒井城跡第3次調査区全景

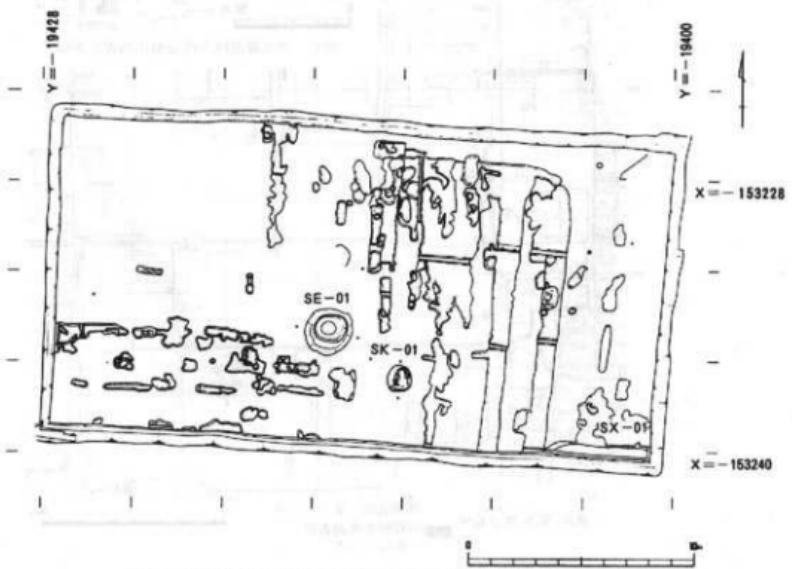


図32 筒井城跡第3次調査検出遺構平面図 (S : 1/250 文献33より引用)

D. 唐古・鍵遺跡（磯城郡田原本町）

唐古・鍵遺跡は弥生時代の巨大集落遺跡として有名であるが、数十次を数える発掘調査のなかで中世の唐古集落の姿も徐々に明らかになりつつある。

唐古・鍵遺跡の発掘調査のうち8・11・14・16・19・20・22次の各調査で中世の造構が検出されている。その主なものは、屋敷地を囲む環濠と思われる大溝、屋敷地内を区画する大溝、建物跡、井戸である。環濠は幅約6m、深さ約1.4mで南北方向の一部で東側に張り出している。その張り出し部分の西に一辺約30mの方形区画溝がある。この溝は、幅約4m、深さ0.7mで環濠よりやや古いと考えられている。（参考文献2、20、21）

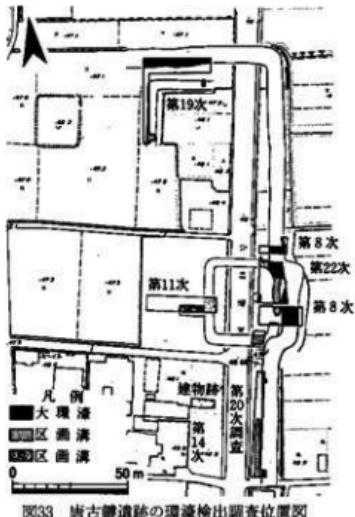


図33 唐古鍵遺跡の環濠検出調査位置図

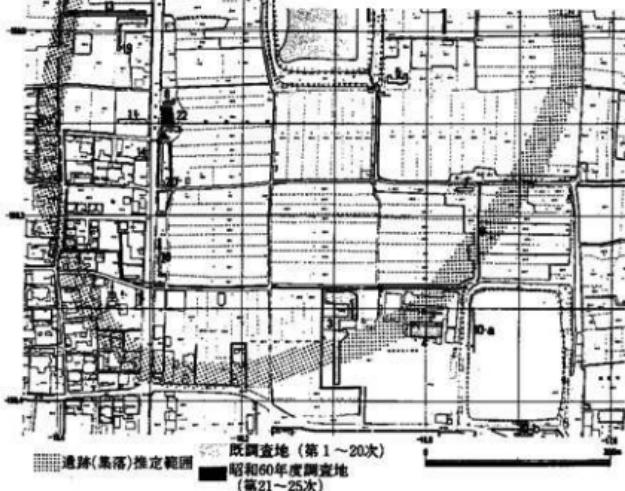


図34 唐古・鍵遺跡調査位置図（文献23より引用）

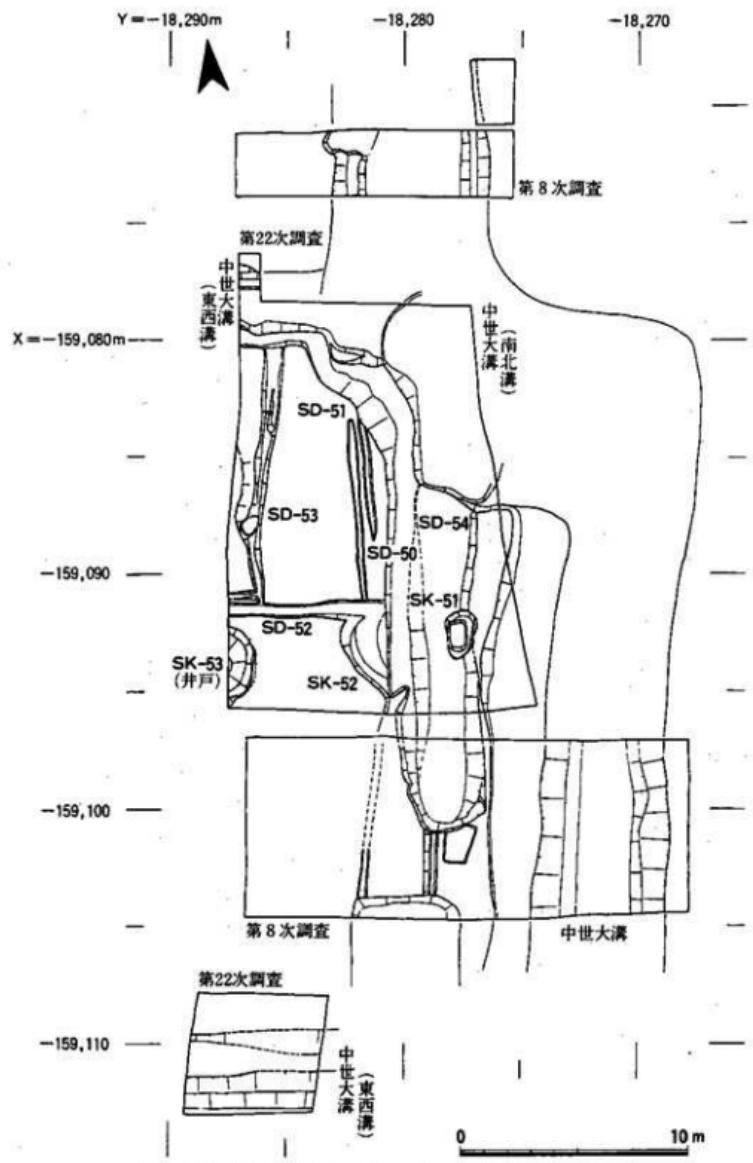


図35 唐古、鍵遺跡第8・22次調査検出遺構平面図（文献23より引用）

E. 金剛寺遺跡（磯城郡田原本町金剛寺）

金剛寺遺跡の発掘調査は、現在の金剛寺の集落内で実施され、調査面積も狭く、環濠と思われる溝の一部を確認したに過ぎないが、かつての金剛寺城の一端を知ることができた。また、環濠に架かる橋の跡も検出され、環濠にかかる施設についての貴重な資料が示された。濠は、鉤型に交わり、推定幅は8m、深さは1.4mである。橋は、濠の交わる部分より東にあり、橋脚が濠の北肩と中央部分で確認された。この橋脚の間隔から、橋の幅は1.5mとなる。（参考文献 22）



図36 金剛寺遺跡調査位置図 (S : 1 / 500)

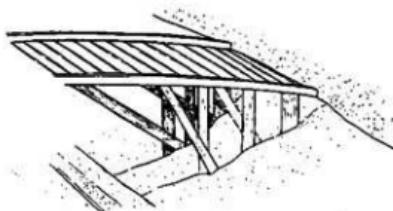


図37 金剛寺遺跡検出の橋架復元図

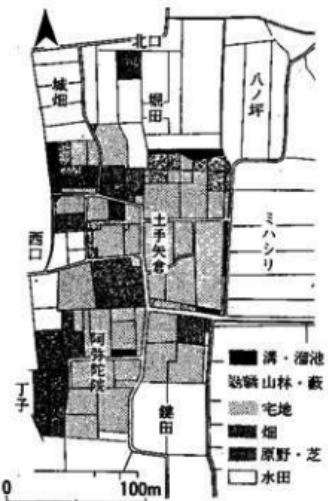


図38 金剛寺集落の地割、地目（左）と推定される環濠、土堀（右）(S : 1 / 400)

（このページの図はすべて文献24より引用）

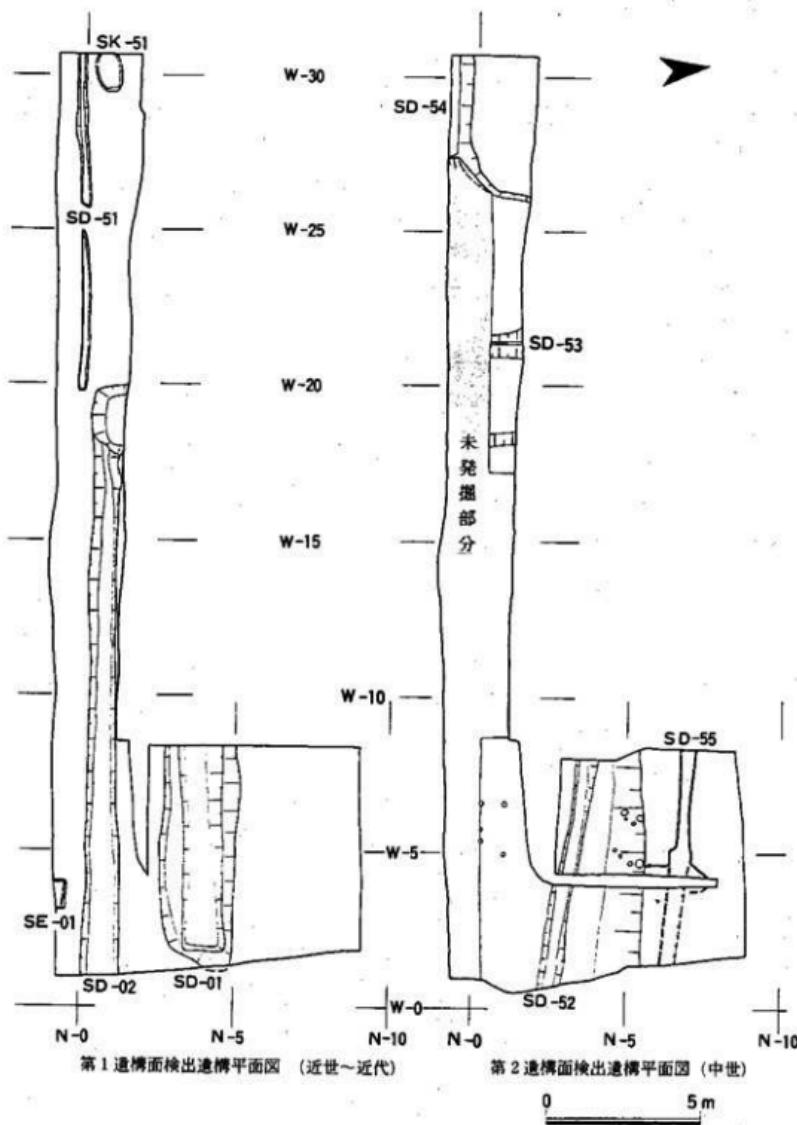


図39 金剛寺遺跡検出遺構平面図（文献24より引用）

F. 法貴寺遺跡（磯城郡田原本町法貴寺）

1982年に、奈良を襲った大風水害は思わぬ埴土座をわれわれに残して行った。法貴寺遺跡の発掘調査もそのひとつで、大和川災害復旧事業として初瀬川の水を直線的に流すための工事の事前調査で、権原考古学研究所により1984年から1985年にかけて行われたものである。

法貴寺遺跡では、環濠をともなう屋敷地、寺、神社、耕作地が確認され、中世集落の構造を明らかにした奈良県下でも唯一の非常に貴重な発掘調査であった。屋敷地は、東側の濠を確認していないものの、四方に一重あるいは二重の濠を巡らせていた。濠に囲まれた土地は約2500m²で若狭集落の北で確認された環濠屋敷地とほぼ同規模である。屋敷地内には10棟ほどの建物が建ち、その中で最大のものは桁行七間、梁行六間で南東隅が鍵手になるものである。屋敷地の北東側は耕作地として利用されていた。屋敷地の南の調査地では屋敷地とともに、法貴寺の子院と天満宮背面の空閑地を確認した。特に、神社背面の空閑地は、何らの施設の痕跡も見られず、集落形成時より今日までそのままであった。

以上の遺構の廃絶については、濠の埋没によってあきらかにされる。濠は14世紀中頃より順次埋没がはじまり、15世紀なかばで環濠屋敷地の北と南の2本の濠が埋没してしまう。したがって、環濠屋敷も15世紀前半には廃絶していただろうと考えられている。西の濠については、18世紀前半まで灌漑用の溝として残る。以後、この屋敷地には、建物の建てられることはなかった。（参考文献2、4、5）



図40 法貴寺遺跡調査位置図（文献4より引用）

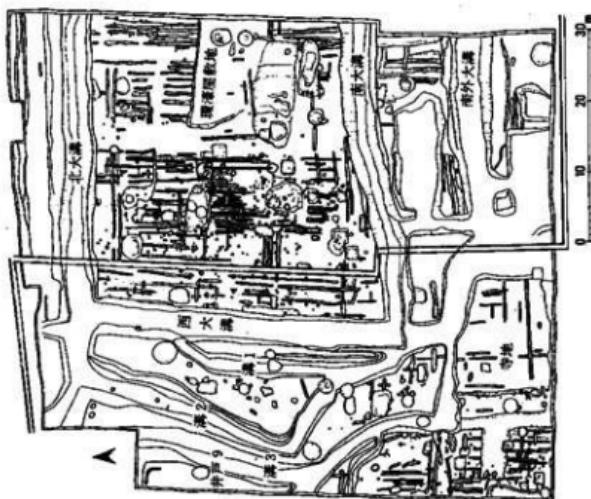
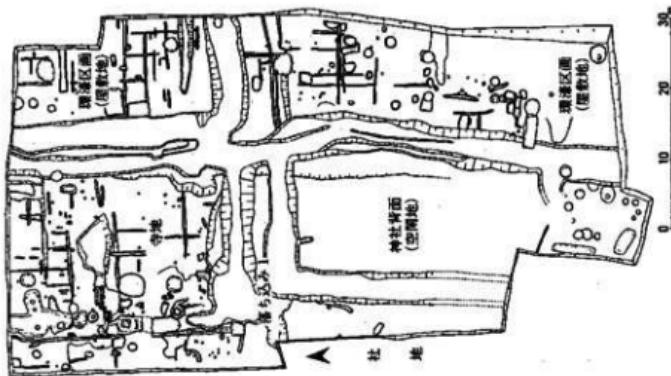


図41 法貴寺遺跡検出遺構平面図 (S : 1/800文献5より引用)

G. 十六面・薦王寺遺跡（磯城郡田原本町）

現在でも、環濠を残す薬王寺の集落と近世に保津集落より分村した十六面の集落のちょうど中間に位置する当遺跡は、国道24号線バイパス道建設工事に伴う1980年の試掘調査により、その存在が明らかとなつた。発掘調査は1981年より1982年にかけて櫛原考古学研究所により実施され、中近世

と古墳時代の遺構が検出された。

この調査によって中世の集落に関係する大小の溝38本、井戸132基などが検出された。環濠及び環濠の中の屋敷地を巡る内濠は北第II調査区、南第I調査区で検出されている。環濠の幅は約4m、深さ約1m、内濠の幅は約6m、深さ約2mである。また、北I区では、環濠集落形成に先行する屋敷を巡る濠が検出されている。

十六面・薬王寺遺跡の調査で特に重要な点は、古代から中世に至る集落の変遷を知る貴重な結果が得られたことである。発掘調査報告書のなかで調査担当者の松本洋明氏は、14世紀までの段階では、散村・疎棲村の形態、14世紀は環濠屋敷が出現し、また集村化の始まる時期といえるとされている。そして、15世紀にはいり、集村化した集落に環濠が巡り、環濠集落の出現期をむかえる。環濠内には、内濠も巡り、中世環濠集落の形態を整えていく。しかし、この環濠集落の衰退は早くも15世紀後葉に内濠の埋没により始まり、16世紀から17世紀には順次、環濠が埋没していくとされた。

以上のような、集落の変遷、特に散村・疎塚村から集村へ、そして、環濠集落への変遷については、これまで歴史地理学の方面の研究から考証されていたが、この発掘調査によってはじめて、考古学的な実証がなされたのである。こうした点からも十六面・薬王寺遺跡は、注目されるべき重要な遺跡であると言える。

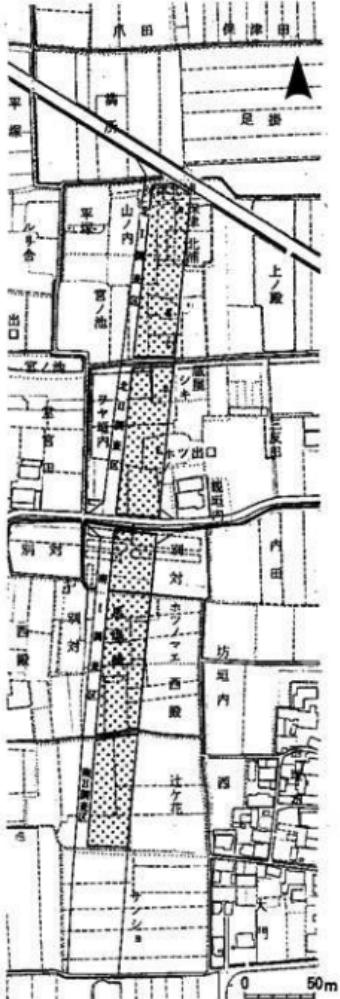


図42 十六面・薬王寺遺跡調査位地図

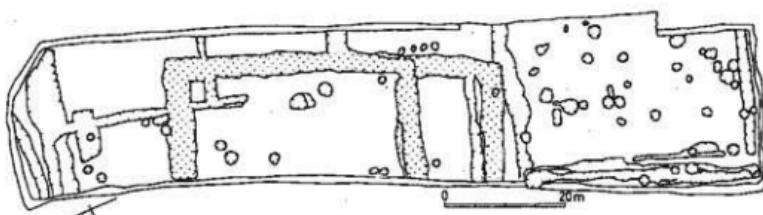


図43 十六面・薬王寺遺跡北I調査区検出遺構平面図（トーンは屋敷を巡る環濠）

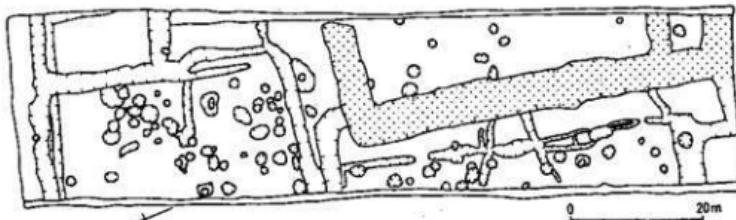
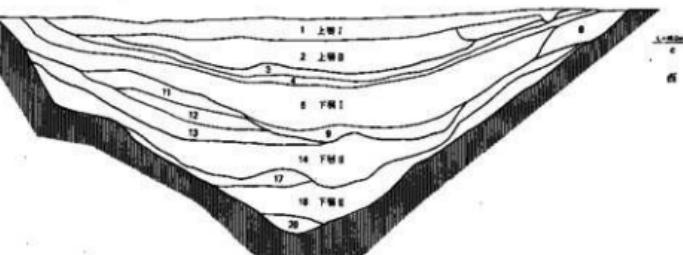
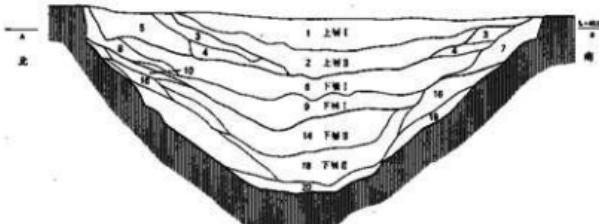


図44 十六面・薬王寺遺跡北II調査区検出遺構平面図（トーンは環濠内の屋敷地区画）



1 青灰色土（上層Ⅰ）	5 緑青灰色土	9 青灰色粘土（下層Ⅱ）	13 緑青色粘土	17 青褐色粘土
2 青灰色粘土（上層Ⅰ）	6 黑灰色粘土（下層Ⅰ）	10 灰色砂	14 青灰色粘土（下層Ⅲ）	18 緑青灰色粘土（下層Ⅲ）
3 青灰褐色土	7 黑灰色土	11 粘灰色粘土	15 青灰褐色砂	19 青灰色粘砂
4 緑青灰色粘土	8 灰色砂砾	12 紫灰色粘土	16 灰白色砂	20 青灰色粘土

図45 十六面・薬王寺遺跡北II調査区検出の尾数区画の土層断面図（S: 1/50）

まとめ

以上のように、わずか数例の遺跡ではあるが、紹介してきた。これらの遺跡は発掘調査によって明らかになったもののごく一部であり、紹介すべき遺跡はまだたくさんある。

この項の最初で述べたように、これまで文献資料によって埋めることのできなかった数多くの事実が、考古学的検証によって明らかにされつつある。特に、環濠集落形成以前の環濠屋敷の姿、あるいはさらにそれ以前の村の姿は、これまであまり明らかにはなっていなかったものである。ここに紹介したものでは不充分ではあるが、考古学的調査による成果の一端をうかがい知ることはできるだろう。そして、これからも、まだ数多くの知見をもたらしてくれるだろう。

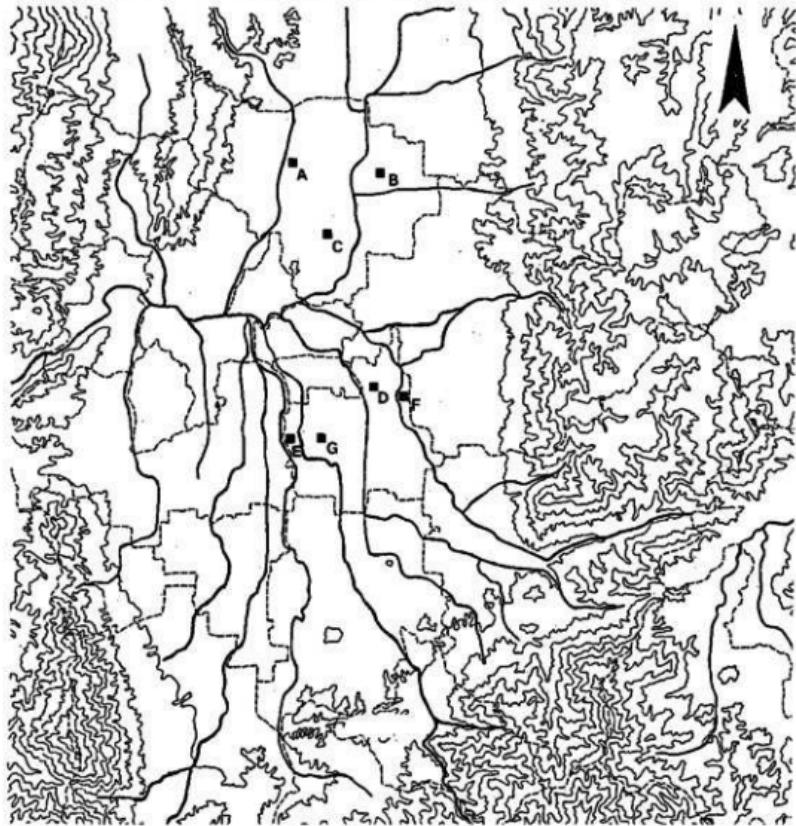


図46 発掘された環濠分布図

3. 大和郡山市域に残る環濠集落

奈良盆地に数多くの環濠集落が存在した、あるいは現在も存在していることは、すでに先学諸氏の調査研究によって明らかであり、また、その実数についても既に述べた。これらの多くが、田原本町から大和川の合流地域に多く、一般的に盆地南部の方が多いこと、さらにその分布が海拔100m以下にあることは、すでに堀井甚一郎氏の述べられているところであるが、大和郡山市は北和地域において最も環濠集落の存在が顕著なところである。村田修三氏によれば、大和郡山市域には34カ所の環濠集落が所在するとされている（文献31）。これは氏の上げられた、奈良県下の各氏町村の中で田原本町・橿原市等に次いで多い数である。

しかし、その反面、稗田、若槻の環濠集落に代表される著名な環濠集落の存在によって、他のものについては以外と知られていない。無論、この2つの環濠集落は、完全に環濠が残されている点において特筆すべきものではあるが、以外にも一部環濠の遺存しているものもあり、これらはいつ消滅するかわからない状況にあり、これらについて現状を報告しておくことも決して無駄ではないだろう。

以上のような動機から大和郡山市域の集落について実地調査を行い、その痕跡の認められるものについてこの項でとりあげた。なにぶん、環濠集落などの地理的領分のものについては門外漢であることから重大な錯誤を犯しているかもしれないがご容赦願いたい。



写真32 稗田環濠の遠景

a. 天井環濠集落

天井環濠は、かつて野村傳四氏が汽車の車窓から紹介している。「郡山驛を出ると間もなく、大軌の南北線（※今の大糸線）が目に入る。この線の少し手前で郡山町の南部に接した一部落が汽車の窓近くに見える。部落の北方には藪が続いて居るが、この藪に沿うて東西に濠がある。と思ふと、この濠は部落の東端で南に折れる。而してこの南に折れた濠が更に西に折れるか如何か、明瞭に見極めがつかぬうちに汽車は部落を遠く離れるのだ。」南と西の濠は今はコンクリートで護岸されたが、今でもこの記述と同じような風景が車窓からうかがえる。（参考文献 19）

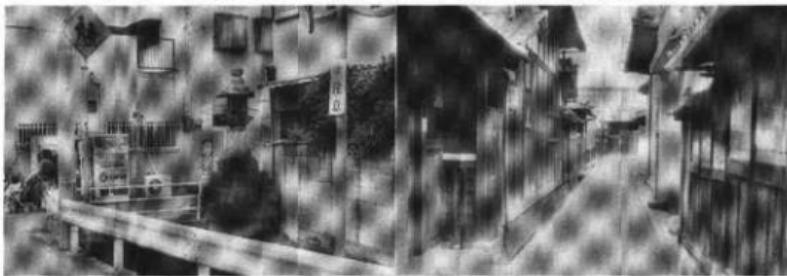


写真38 北西角にある常夜燈

写真39 天井町の家並み



図47 現在の天井環濠 (S : 1 / 2,500黒塗は濠の残る部分)

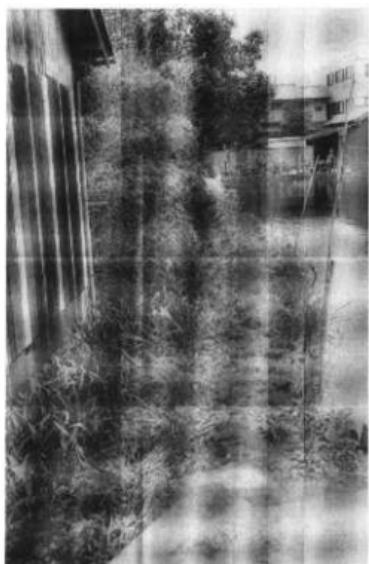


写真40 集落北東側の濠(1)



写真41 集落北東側の濠(2)



写真42 集落北側の濠

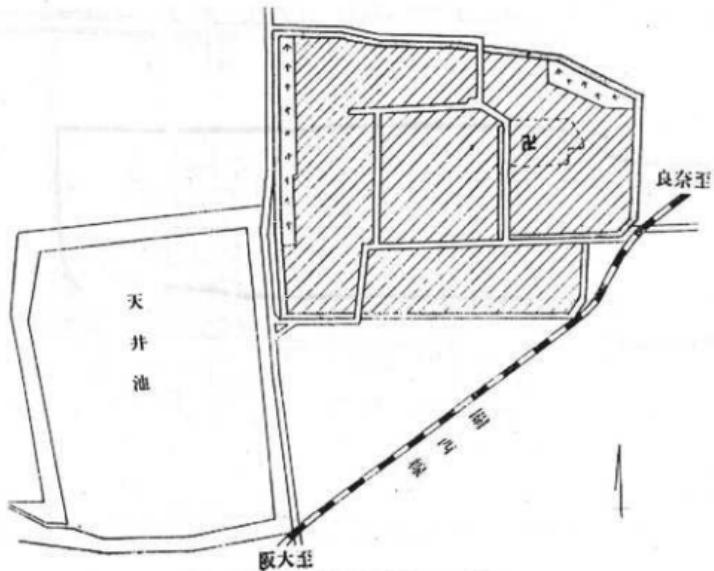


図48 昭和初期の天井濱濠 (文献19より引用)

b. 若槻環濠集落

若槻の環濠集落は数多くの研究者によって取り上げられ、その稗田環濠集落とともに最も著名な環濠集落といえる。この環濠集落が著名となった理由は、環濠がほぼ完全に遺存していることもある。



写真43 集落北側の濠

が、渡辺澄夫氏や金田章裕氏の詳細な研究によって、環濠集落形成以前の散村形態が復元され、環濠の形態が整うまでの変遷、そして環濠形成の時期がほぼ断定できるからである。

環濠形成の時期は、文正元年（1466）以前とされる。

現在の若槻環濠集落では、特に西辺の天満宮・觀音堂の面するところが、土居などの施設がよく残って居

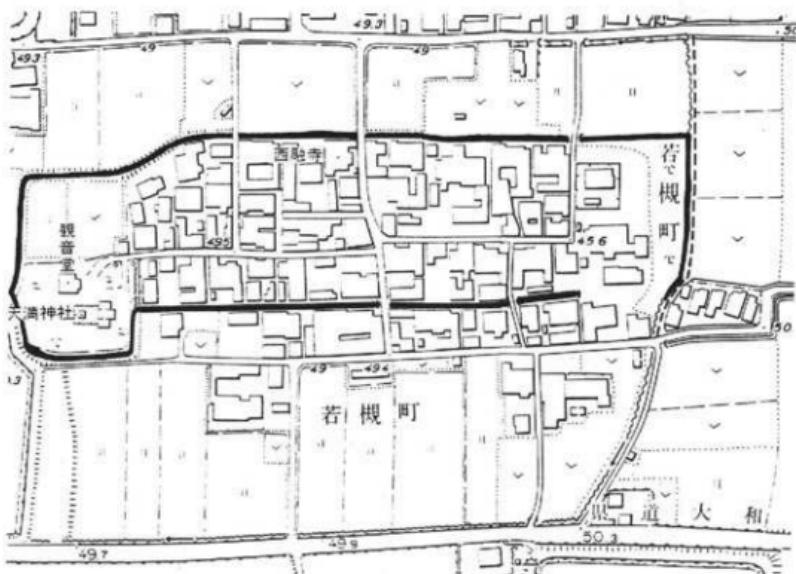


図49 現在の若槻環濠（S : 1/2,500黒塗りは濠の残る部分）

る。おそらくこの地域が、防御拠点となったものと推定されている。『和州十五郡衆徒国民郷土記』や『大乘院寺社雑事記』にも「若槻平城」や「若槻堀」の記載がある。

また、天保六年（1835）の地図がいまでも残されている。（参考文献 8、9、12、25、31、34）



写真44 集落北西側の濠(1)



写真45 集落北西側の濠(2)



図50 天保六年（1835）の若槻環濠集落（文献8より引用）

c. 井戸野環濠集落

井戸野は南に菩提仙川と接し、L字型を呈する集落である。この集落は、環濠集落研究に先鞭をつけた、小川琢治、牧野信之助両氏に取り上げられ、戦前に調査された環濠として、学史上非常に貴重な環濠集落である。当時の姿は、牧野氏の解説によると八幡神社を中心として北、東、西に濠を巡らせ、また、西南部を別の区画に分け、二重の環濠となっていた。氏はこの部分が城の本丸に相当する施設として機能したと考えられた。

現在では、当時のままに残っているのは北辺と東辺北半のみで、東辺南半は消滅してしまった。西辺はコンクリートによって護岸されているが、濠としての存在を今に伝える。また、二重になった内側の濠は、排水溝にその面影をとどめている。現在も昔のままである東辺北半は八幡神社の東から北の部分が遺存しているが、濠の幅はかなり縮小している。神社東の部分は既に水もなく注意しないと濠であることを見落してしまう。神社北の濠についても水量は少なく辛うじて濠の痕跡をのこすのみである。(参考文献 8、29)

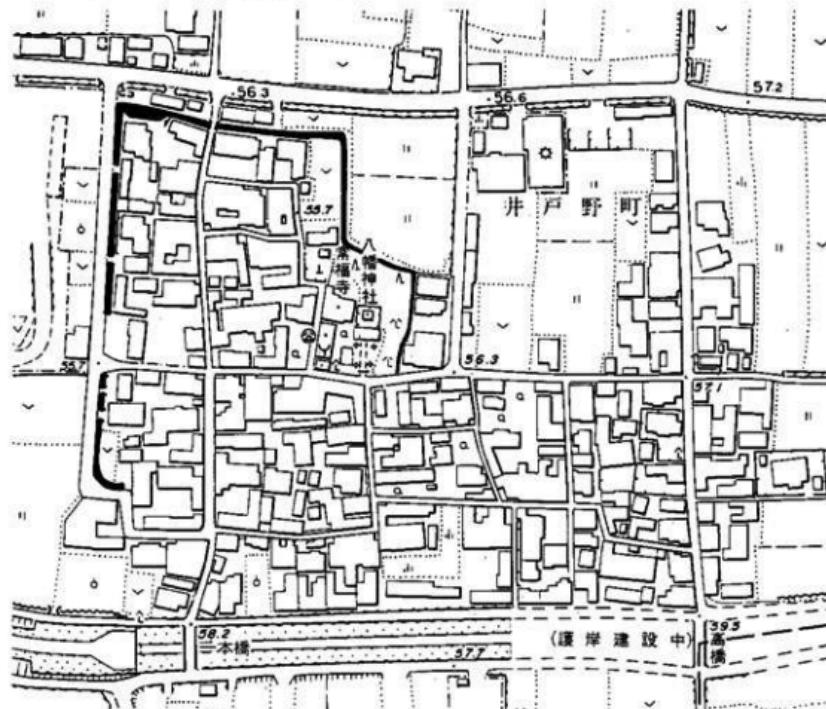


図51 現在の井戸野環濠 (S : 1 / 2,500 黒塗は濠の残る部分)



写真46 集落北東側の濠

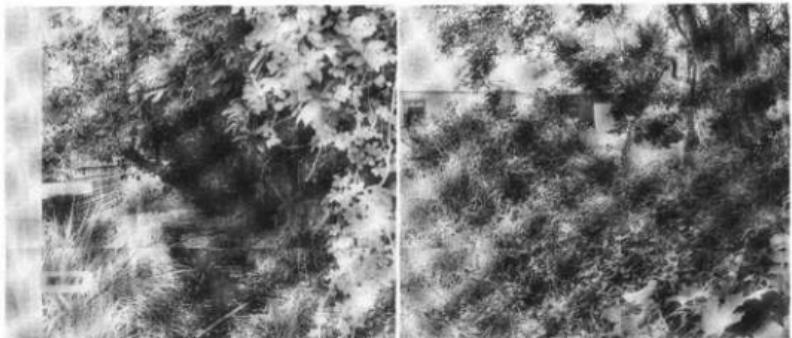


写真47 集落北西隅の濠

写真48 集落北側の濠



写真49 集落西側の濠

d. 番条城

番条は大乗院衆徒として、この地に勢力のあった番条氏の根拠地となり、城塞的発展を遂げた環濠集落である。『大乗院寺社雜事記』によると長祿三年（1459）に筒井氏に攻められた際、番条の濠で数知れずの郷民が溺死したとの記載があり、この時期には環濠をもった集落の存在したことが確認できる。番条氏は応仁の乱ののち一時筒井方に属したが、明応六年（1497）、再び筒井氏と争い、以後、筒井氏に服するようになったようである。

番条城形成の変遷については、詳細に検討されており、最初の段階において北端に環濠屋敷が、南端に塊村がそれぞれ形成されたと考えられている。このあと、北側はさらに城塞化が進み、また、番条一族に戊亥殿、辰巳殿と文献に見られることから、城館地域の拡大がなされたようである。一方、南側でも番条氏の勢力拡大とともに、集村化と環濠の形成がなされ、現在の様になったと推定されている。

現在は、集落北側と東側の濠がよく残っており、特に東側は当時のままであると考えられる。また、支濠も部分的にはあるが、残されている。集落西側については部分的にわずかにその痕跡を残すのみとなっている。（参考文献 2、11、25、29、31）

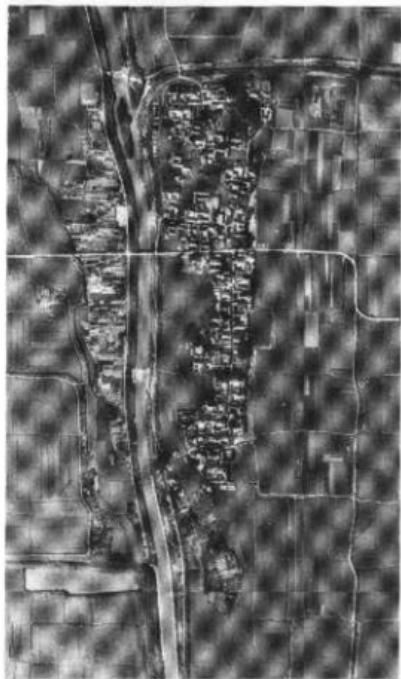


写真50 昭和38年の番条

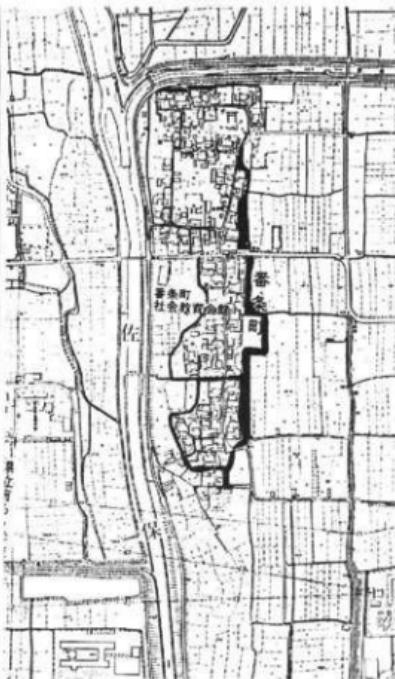


図52 現在の番条 (S: 1/10,000)
(黒塗は濠の残る部分)



写真51 集落北側の濠



写真52 集落東側の濠



写真53 番条の家並み

e. 発志院・中城環濠集落

番条の集落より約500m東に存在する発志院・中城の集落は東北隅を欠く鍵形を呈している。環濠は、ほぼ全周が残っているが、大半はコンクリートや石垣によって護岸されており、昔のままの



写真54 集落北西側の濠

写真55 集落西側の濠

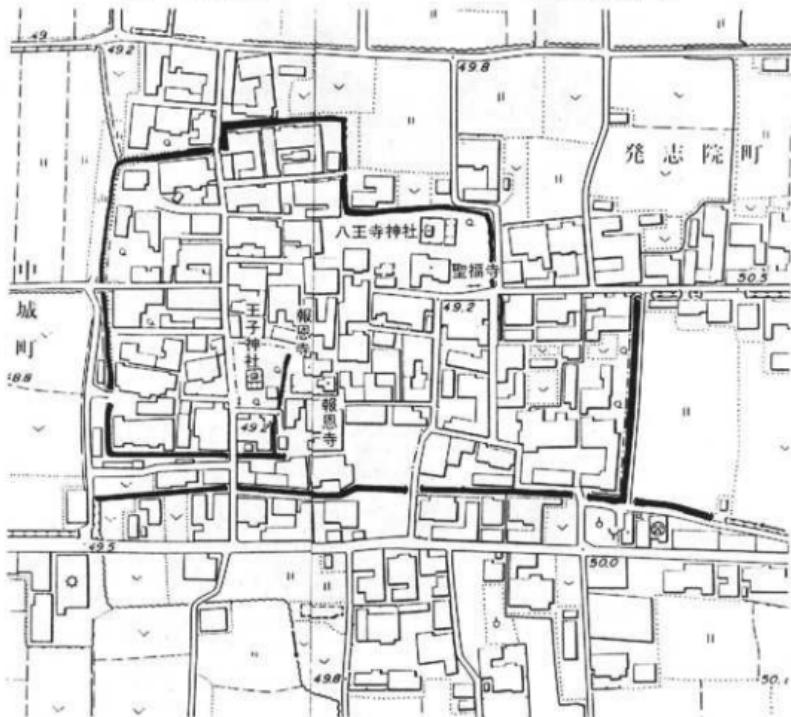


図53 現在の発志院・中城環濠 (S : 1 / 2,500 黒塗は濠の残る部分)

部分は中城町側の西辺南半分ぐらいである。コンクリートによって護岸された北西部分は、現在は幅30cmほど溝となっているが、かつての濠の肩部分までコンクリートによって固められているため、以前の濠の幅員が推定できる。また、南東隅の濠は石垣によってきれいに護岸され、落ち着いた雰囲気を醸しだしている。

(参考文献 8)

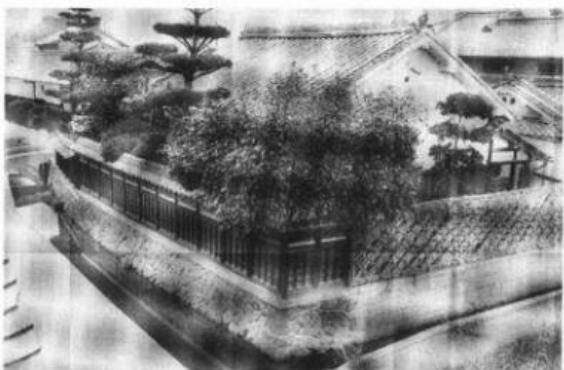


写真56 集落南東隅の濠



写真57 集落南、東側の濠



写真58 集落南側の濠(1)



写真59 集落南側の濠(2)

f. 北西環濠集落

北西の集落は、大和郡山市のほぼ中央部に位置する。環濠はすでにすべてコンクリートにより護岸され、往時の姿をとどめる部分は残っていない。しかし、生活の中に息づいていた、かつての環濠の姿がここにはまだ残されている。

濠は、北から流れる灌漑用水を集落北端で東西に分け、集落の東西をそれぞれ南流させている。



西側の濠は、道沿いに、ほぼ直線状に南下し集落外へぬけていくようになってしまっているが、東側の濠は、現在でも、かつての集落の縁辺部を流れ、また、洗い場の跡が残されていて、こどもたちの怡好の遊び場となっている。

北西の集落では今でも濠が生活の一部となっていることを感じさせる。

写真60 濠で遊ぶ子供たち

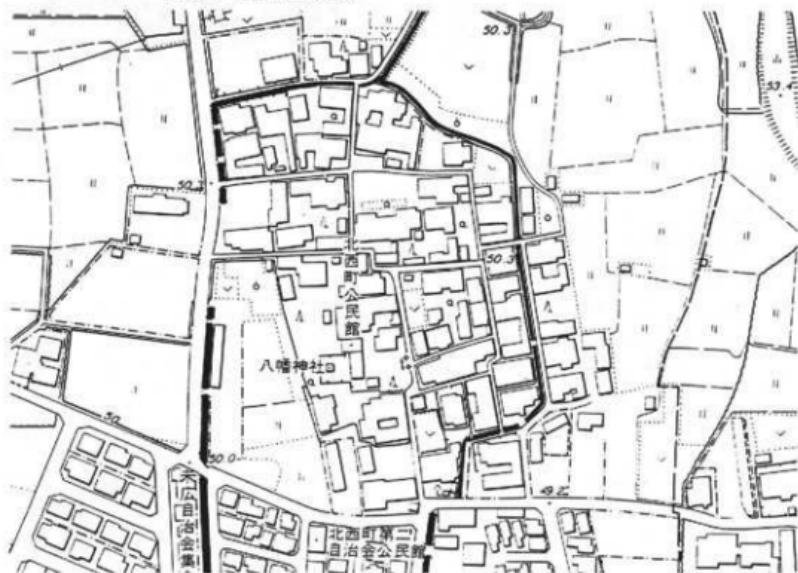


図54 現在の北西環濠 (S : 1 / 2,500 黒塗は濠の残る部分)

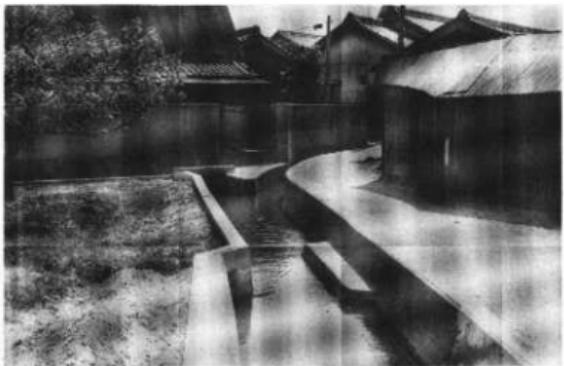


写真61 集落北側の状況



写真62 集落北東側の濠



写真63 集落東側の濠

8. 筒井城

大和一国を統一した筒井氏の居城として、著名であるこの筒井城も今では、集落の北側と音田比売神社の東側に濠の痕跡を残すのみである。しかし、昭和38年に撮影された航空写真には、水田にはっきりとかつて濠の痕跡を残している。現在は、この水田も徐々にその姿を消しつつあるが、ま

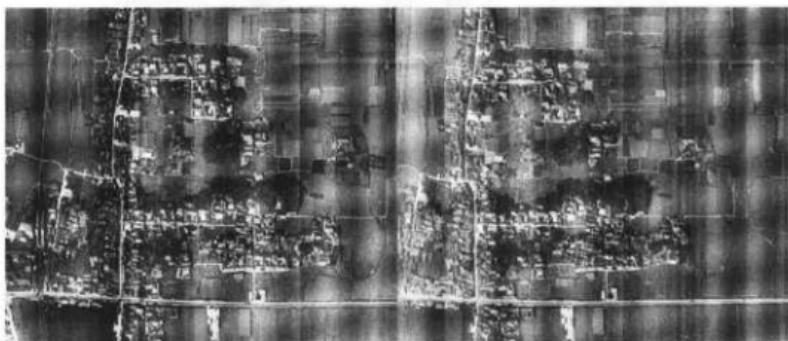


写真64 昭和38年の筒井城ステレオ空中写真（立体視すると濠跡の水田がまわりより低いことがわかる）



図55 現在の筒井城跡 (S : 1/5,000 黒塗は濠の残る部分)

だ、そのあとを認めることはできる。

筒井氏及び筒井城についての史料は、数多く残されており、そのすべてをここで紹介することはできないが、筒井城の初見は『満済准后日記』の永享元年（1429）の項である。筒井城は筒井氏の盛衰と共に発展と落城を繰り返す。そして最終的には筒井氏の大和統一によって、天正七年（1579）に大修築が行われたが、翌年、織田信長の大和一国破城命令によって廃城の途をたどることとなるのである。（参考文献 10、15、18、29、31）



写真65 菅田比売神社



写真66 神社東側の濠



写真67 集落北側の濠(1)

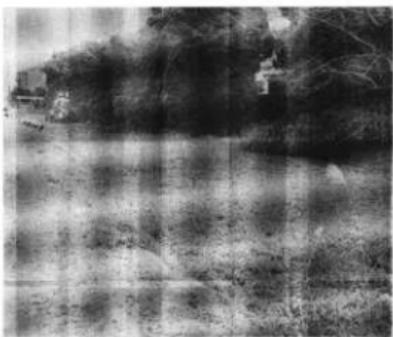


写真68 集落北側の濠(2)

おわりに

奈良盆地には、かつて数多くの環濠集落が存在した。現在でも一部あれ、その面影を残す集落はたくさん残されているだろう。各氏町村で発行しているその町の地図を広げてみると、そこかしこに濠のあることがよくわかる。濠は奈良盆地のひとつつの風景になってしまっているのかもしれない。

だが、これらの濠はその使命をほとんど終えてしまい、今やその多くが消滅し、あるいは消滅しかかっているのである。時代の移り変わりの中で、景観が変化して行くのはある意味でしかたのないことだろう。より生活に即した形でまわりの環境を改变することは、人類の活動そして歴史そのものであり、現在の我々の生活もそうした歴史のうえに立脚しているのである。だから、これらの濠を埋めて駐車場を作り、道幅を広げることも濠にとっては当然の運命といえるだろう。しかし、ここでもう一度これらの濠を埋めてしまう前に、思い出してほしい。そこには、その村の歴史、奈良の歴史、そして日本の歴史を沈黙の中で物語る非常に身近な証人のいることを。

歴史的景観ということばもきかれて久しい。日本人は働き過ぎ、もっと心にゆとりを、の掛声も既に耳慣れってしまった。環濠とは歴史的景観を構成する貴重な文化遺産であるとともに、奈良を故郷とするものにとって、懐かしい風景、自分史のなかのかけがえのない遺産であること忘れないでいてほしい。

参考文献

1. 石田貞雄・岡田英男「中家の魅力」向陽書房 1988年
2. 市川秀之「環濠集落の成立に関する考察」『史泉』65 関西大学史学・地理学会 1987年
3. 伊藤勇輔「筒井城跡」「奈良県遺跡調査概報」1982年 第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所編 1983年
4. 今尾文昭「法貴寺遺跡」「季刊自然と文化』30 緑光資源保護財団 1990年
5. 今尾文昭・田中一広「法貴寺遺跡発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報」1986年度 第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所編 1989年
6. 太田三喜「中世末期における居館の様相」「天理大学学報』157 天理大学学術研究会 1988年
7. 亀井伸雄「今井町形成史論」「研究論集』VII 奈良国立文化財研究所学報 第47冊 1989年
8. 萩多芳之「大和の環濠集落」日本古城友の会研究紀要 II 1976年
9. 金田章裕「条里と村落の歴史地理学研究」大明堂 1985年
10. 桑原公徳「中世城館の分布と形態及び規模」「信濃』31-12 信濃史学会 1979年
11. 桑原公徳「中世城館の歴史地理学的研究」「歴史地理学プロシーディングス』古今書院
12. 桑原公徳「環濠集落」「歴史がついた景観」古今書院 1982年
13. 谷岡武雄「環濠集落」「奈良盆地」奈良女子大学地理学教室 1961年
14. 天理市史編纂委員会「改訂天理市史」下巻 天理市 1976年
15. 徳永光俊「水と村・中世から近世へ」「治水の地域史」地域史研究会 1985年
16. 中井一夫「若柳庄間連遺跡第3次発掘調査概報」「奈良県遺跡調査概報」1981年度 第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所編 1983年
17. 奈良県立橿原考古学研究所編「大和国条里復原図」1981年
18. 野崎清孝「大和の城館」「講座考古地理学』3 学生社 1985年
19. 野村傳四「大和の城内」天理時報社 1943年
20. 渡口芳郎「古屋敷遺跡第3次発掘調査概要報告」大和郡山市文化財調査概要22 1991年
21. 藤岡謙二郎「日本歴史地理学序説」培養書房 1962年
22. 藤田三郎「奈良盆地における中世城館と近世集落について」「考古学と移住・移動」同志社大学考古学シリーズ II 1985年
23. 藤田三郎「昭和60年度 唐古・健遺跡 第22・24・25次発掘調査概報」「田原本町埋蔵文化財調査概要4 1986年
24. 藤田三郎「金剛寺遺跡発掘調査概報」「田原本町埋蔵文化財調査概要10 1988年
25. 保存修景計画研究会「下ノ道と環濠集落」「環境文化』45 環境文化研究所 1980年
26. 畦井甚一郎「最新奈良県地誌」大和史蹟研究会 1962年
27. 堀内義隆「環濠集落について」「田原本の歴史』I 田原本町 1983年
28. 堀部日出男「大和環濠聚落の史的研究」「考古学論叢」第1冊 奈良県教育委員会 1951年
29. 牧野信之助「土地及び聚落史上の諸問題」アリス舎牧新社 1976年
30. 松本洋明「十六面・薬王寺遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告54 1988年
31. 村田修二他「日本城郭大系』10 三重・奈良・和歌山 新人物往来社 1980年
32. 山川均「筒井城第2次」大和郡山市文化財調査概要11 1988年
33. 山川均「筒井城第3次森日地区発掘調査概報」「大和郡山市文化財調査概要20 1991年
34. 渡辺澄夫「増訂 堀内莊園の基礎構造」吉川弘文館 1969年



付. 下ッ道第2・3次発掘調査報告

例 言

1. 本付載は、下ッ道第2・3次発掘調査の報告書である。
2. 調査はいずれも大和郡山市教育委員会が実施し、現地は社会教育課技師服部伊久男が担当した。
調査原因・期間等は本文を参照されたい。
3. 調査には下記の作業員、補助員が参加した。

第2次 勝浅沼組

第3次 東組 米田肇（大阪市立大学 当時）、吉村克俊（近畿大学 当時）、木寅孝次
(大阪工業大学 当時)

4. 整理作業は、米田肇が遺物実測、武田浩子及び宮崎秀俊（関西大学）がトレース・レイアウト
を担当した。
5. 本書の執筆、編集は服部が担当した。

本文目次

I	はじめに	67
II	第2次調査	68
	1. 契機と経過	68
	2. 遺構	69
	3. 遺物	71
III	第3次調査	73
	1. 契機と経過	73
	2. 遺構	74
	3. 遺物	79
IV	まとめ	86

図目次

図1	下ッ道第1～3次調査地点 (S = 1 / 20,000)
図2	第2次調査地点 (右下 S = 1 / 1,000、左 S = 1 / 5,000)
図3	トレンチ上層断面図
図4	土器・木製品実測図 (S = 1 / 3)
図5	第3次調査地点 (右下 S = 1 / 1,000、左 S = 1 / 5,000)
図6	トレンチ平面図・断面図
図7	土器・鉄製品実測図 (S = 1 / 3)
図8	和同開拵拓影 (S = 1 / 1)
図9	橋の構成材1 (S = 1 / 30)
図10	橋の構成材2 (S = 1 / 30)
図11	杭実測図 (S = 1 / 12)

表目次

表1	下ッ道調査一覧
----	---------

写真目次

- 写真1 トレンチ全景（南西から）
- 写真2 土層堆積状況（南東から）
- 写真3 出土遺物
- 写真4 トレンチ全景（南から）
- 写真5 トレンチ全景（東から）
- 写真6 橋S X-01細景（南から）
- 写真7 橋S X-01細景（南東から）
- 写真8 橋S X-01細景（南から）
- 写真9 橋S X-01細景（南東から）
- 写真10 橋S X-01細景（北から）
- 写真11 出土遺物
- 写真12 橋S X-01細景（南から）
- 写真13 橋S X-01細景（南東から）
- 写真14 橋の部材

I はじめに

下ッ道の調査は、当市内で3次にわたり実施されている（表1参照）。第1次調査は権原考古学研究所が行い、奈良～平安時代の構梁を検出、橋畔から多量の祭祀遺物が出土したことによく知られている。今回報告する第2・3次調査は、それぞれ通学路の改修と市道拡幅工事の事前調査として実施したものである。第2次調査では東側溝を検出し、その埋没時期を知ることができた。また、第3次調査では、下ッ道を横切る河道跡と橋を検出し、下ッ道の交通機能の一端が知れた。各々の詳細は以下に委るが、単に古代の官道の実態が知れるにとどまらず、稗田の環濠の西辺部が下ッ道を利用しているという古くからの指摘を想い起せば、本書に付章として付け加えることは、稗田環濠の成立史の一端を明らかにするものとして有意義と考える。

次数	調査地	調査期間	調査機関	調査原因	概要
1	稗田町 若槻町	1980. 9. 10 1981. 2. 10	奈良県立権原 考古学研究所	宅地造成 及 学術調査	人工河川、東西側溝、橋 暴書人面土器、ミニチュアカマド、 土馬、蒸牛、木簡、絵馬等
2	稗田町	1983. 12. 10 1983. 12. 11	大和郡山市 教育委員会	稗田町通学路 拡幅工事	東側溝 土器類、土馬、木簡
3	中城町	1984. 5. 7 1984. 6. 11	"	市道番号高野線 拡幅工事	自然河道、橋 土器類、和同開珎

表1 下ッ道調査一覧

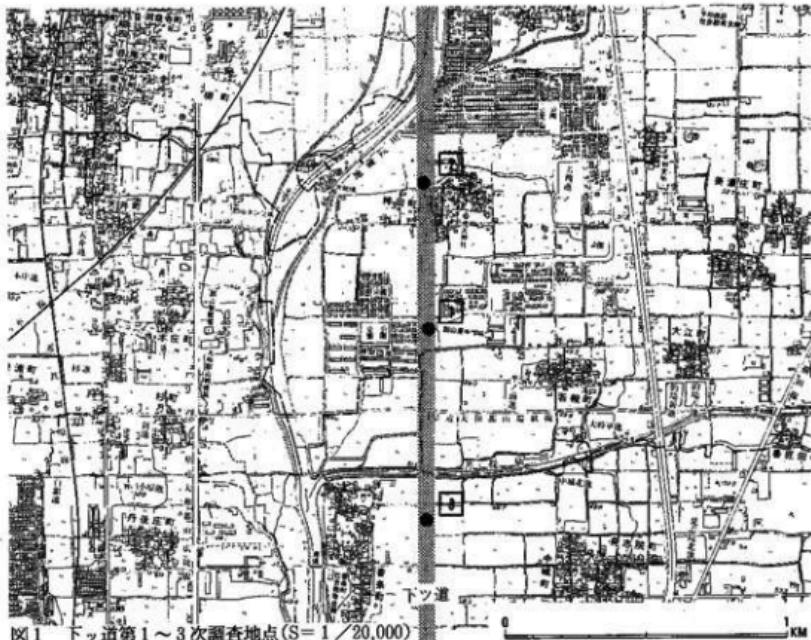


図1 下ッ道第1～3次調査地点(S=1/20,000)

II 第2次調査

1. 契機と経過

調査は、通学路と拡幅工事を原因として実施した。稗田環濠の西辺及び北辺西半部を整備し、環濠の浚渫、補強を図るとともに外側に幅4mの道路を付設、通学の便に供する事業である。主管課(市教育委員会総務課)と協議とした結果、下ツ道の側溝の検出が予想される環濠北西隅の畠地において調査を実施するに至った。

調査は、1983年12月10日～12月11日まで実働2日間を費した。当初の予定通り東側溝を検出したものの、平面的な調査は行えず、もっぱら断面調査の様相をもって終了した。調査面積も2m×9mの18m²に留っている。



図2 第2次調査地点 (右下S=1/1,000、左S=1/5,000)

2. 遺構

調査面積が狭く、壁面の崩壊が著しく、環濠の水が浸透するなど、良好な状態ではなかったが、下ッ道の東側溝を確認することができた。ただし、側溝両肩部の検出にとどまり溝底を全て出しきったわけではない。

堆積土は図3の通りであるが、第1～5層がまず上部堆積層としてとらえられる。第5層は旧表土下の床土であり、中世の遺物を少量含んでいる。4層は烟の造成土である。A～S層が下ッ道東側溝の堆積土であり、シルト層、砂層、砂礫層の互層となっている。この内、東肩部のO層（灰色粘質土層）、とQ層（灰緑色粘質土層）は、軟弱な東肩部を補強する目的で張り付けたものと考えられる。同様に、西肩部のB・C・R・S層も壁面補強土と考えられる。

I～VII層は、砂層を主体とする堆積土で、下ッ道側溝がベースとした層である。堆積の状況からみて河道内の堆積土と考えられる。この点は、後述するように、現存条里に斜行する環濠の北西辺が旧河道路跡を利用しているという立会調査の結果と符合する。

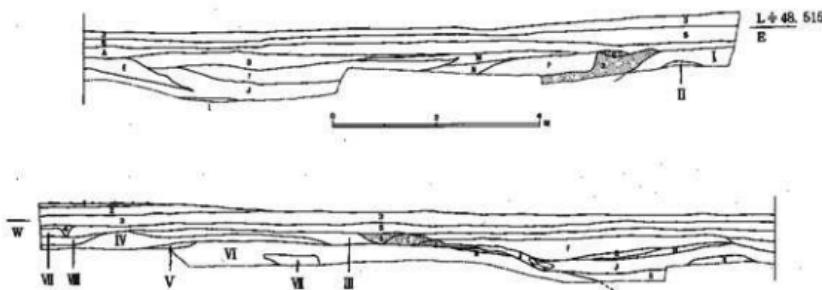


図3 トレンチ土層断面図

- | | |
|--|----------------------|
| 1. 表土 | L. 灰白色砂礫層 |
| 2. 淡灰緑色土層 | M. 灰色シルト層 |
| 3. 淡灰褐色土層 | N. 灰色粘土層 |
| 4. 黄色粘質土層（盛十） | O. 灰色粘質土層 |
| 5. 淡灰色土層（旧床土、鉄、マンガン
斑文多い、中世土器類少量含む） | P. 灰白色砂礫層（C・G層と同じ状況） |
| A. 淡灰色粘土層 | Q. 灰緑色粘質土層（B層に類似） |
| B. 淡緑灰色シルト層 | R. 暗灰色砂礫層 |
| C. 灰白色砂礫層（径2～5cmの小石多く含む） | S. 淡灰緑色粘土層 |
| D. 灰白色細砂層 | I. 淡緑色微砂層 |
| E. 青灰色シルト層 | II. 灰色粗砂層 |
| F. 灰色粘土層（粘性強い） | III. 淡灰白色細砂層 |
| G. 灰白色砂礫層（C層とほぼ同じ状況） | IV. 淡茶色細砂層 |
| H. 灰白色シルト層 | V. 淡茶橙色細砂層 |
| I. 白色細砂層 | VI. 灰色細砂層 |
| J. 灰色粘土層 | VII. 緑色細砂層 |
| K. 灰色粘土層（J層と同じ） | VIII. 灰色粘質土層 |



写真1 トレンチ全景（南西から）

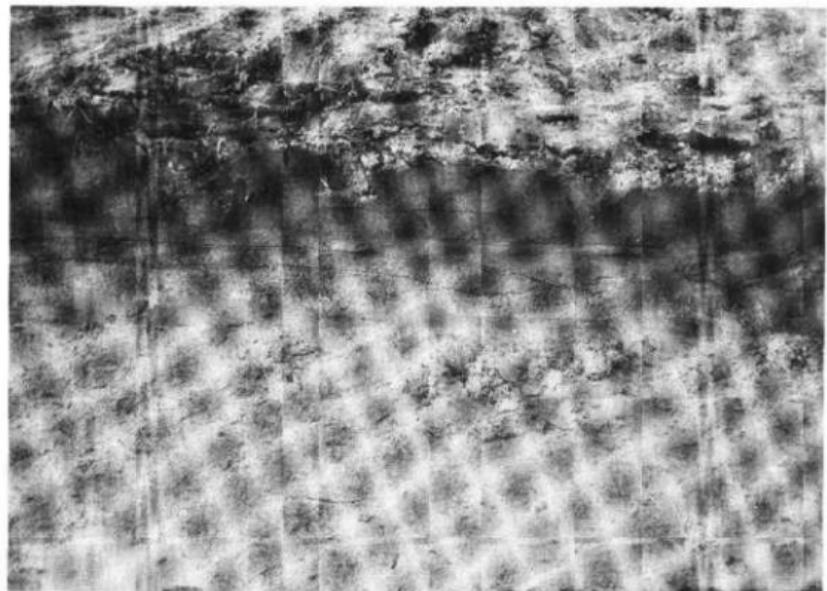


写真2 土塁堆積状況（南東から）

さて、東側溝の規模は、側溝の掘込肩部で計測すると18.09mであり、補強土の肩部では16.43mを測る。各々の場合の側溝芯の座標は下記の通りである。

測 点	X 座 標 値	Y 座 標 値
側溝掘込部芯	-151,171.176m	-18,556.096m
貼付補強部芯	-151,171.088m	-18,555.939m

なお、トレンチが本土座標軸に途行しているため各々の場合で、X・Y値にずれがあることを諒解されたい。また、この2つの側点では座標値が東西方向で約20cm ズレてくるが、大きな差がないことからいずれの計測値を採用しても問題はないと思われる。以後の検討においては貼付補強した側溝の芯座標を使うことにしたい。

3. 遺物

全体の遺物量は少なく、コンテナ1/3ほどである。側溝内最終堆積層のA層から黒色土器が、F層から須恵器壺Lが出土している。他は各層から出土、出土層位は細かく把握していない。

須恵器・壺L（図4-1、写真3-1）

口径3.9cm、底径3.9cm、器高9.6cm、体部最大径7.1cmを測る完形品。器壁は薄く、器表には水びき痕が著しい。底部には回転糸切り痕が残る。胎土は緻密、焼成良好で暗青灰色を呈する。

土師器・皿C（図4-2、写真3-2）

口径9.0cm、器高1.9cmの完存品。器厚が厚い。口縁端部は水平に近い面を成す。口縁部内外面はよこなで、底部内面に不定方向で施す。底部外面は不調整である。口縁端の一部に煤が付く。焼成良好、明黄灰白色を呈する。

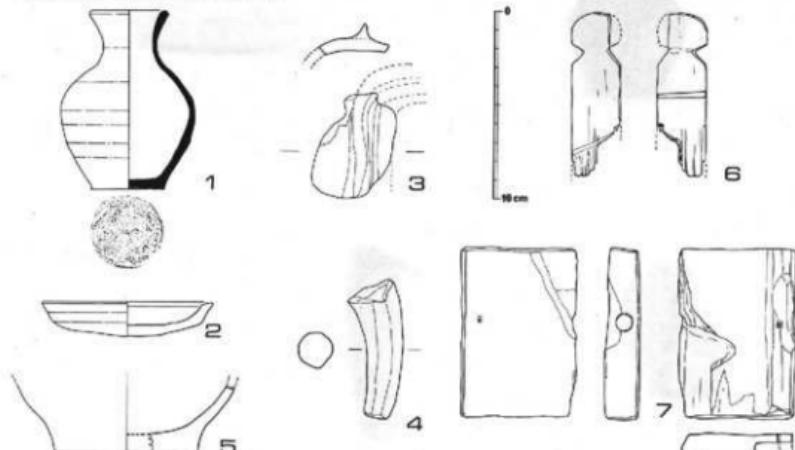


図4 土器・木製品実測図 (S=1/3)

土師器・壺（図4-3、写真3-3）

いわゆるミニチュアのカマドである。廻は粘土帯を貼付けなでて成形する。他の部位の調整もナデが主体である。

土馬（図4-4、写真3-4）

土馬の脚部。造りは丁寧で、焼成も良好である。

弥生式土器・壺（図4-5）

壺の底部と思われる。復元底径7.6cmを測る。径1mmの大砂粒を多く含む胎土で、橙色を呈する。調整等は不明である。

木製品

人形（図4-6）

材の一端の左右にV字形の切り込みを入れ、頭部の両隅部も丸く切り落す。下半部の形態は不明、頭部に墨痕があった。

不明木製品（図4-7）

6×9cm、厚さ1.8cmの板状製品。長側面の一方に径0.9cm、深2.0cmの円孔を穿つ。この円孔を貫通して径1mmの木釘が外側から打ち込まれている。円孔に差し込んだ棒状具（柄部）を止めたものと思われる。用途不明。

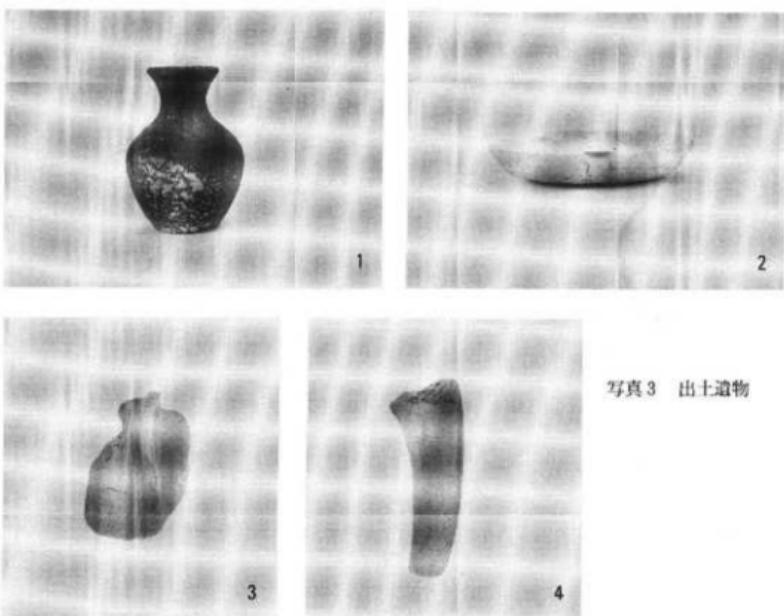


写真3 出土遺物

III 第3次調査

1. 契機と経過

市内番条町の東側に番条高野線という市道がある。幅2mほどの簡易舗装道であるが、この道を拡幅して国道25号線と県道大和郡山環状線とを結ぶ主要道とする事業が市建設課より提出された。番条高野線は、その名が示す通り高野街道、すなわち、下ッ道の位置を踏襲しているものであり、当然事前調査が必要とされた。特に西側溝が検出される可能性があったため、その確認に主眼をおいて調査を実施した。道路の拡幅は現況道路の両側を2mほど広げるものであったため、著しい制約を受ける調査にならざるを得なかった。ほとんどがグリッド掘りに近い状態である。トレーンチは合計20ヶ所に設定したが、西側溝は明瞭には検出できなかった。この内、中城町字式ノ坪に設定したトレーンチでは、偶然橋を検出した。予想だにしなかったことである。以下、このトレーンチの成果について詳しく報告しておきたい。



図5 第3次調査地点（右下S=1/1,000、左S=1/5,000）

2. 遺構

検出した遺構は、自然河道（SD-01）1条と橋（SX-01）である。堆積土の状況は図6に示す通りである。

河道SD-01

旧河道SD-01内の堆積土は第⑥～⑩層であり、細砂層と微妙層が主体である。断面図から河岸に最低2時期の変遷が認められる。古い時期の南岸部は、トレンチ南端の淡緑黄色粘土層である。この時期の北岸部は検出していない。新しい時期の河岸部は第⑩層の堆積土上面であり、この時期に橋SX-01が敷設されたことが知れる。河底と北岸部は判然としないが、図に示すように考えておく。河道SD-01の当初の幅は不明であるが、10mを越える規模が推測される。その後埋没が進み、後述する橋が敷設されたときは4m弱の規模に縮小していたと考えられる。河道の方向は北東-南西方と考えられる。現菩提仙川の旧河道である可能性が高い。この河道痕跡を示す遺存地割等は周辺地を含み見てもまったく遺存していない。

橋SX-01

主脚を2本検出している。いずれもトレンチの西壁に半分かかった状況である。径約40cmの大形の芯持材の先端を尖らせたもので、河底に打ち込んでいた。主脚間の距離は約3.15mである。主橋脚の外側（南・北側）には板材を添える。護岸の機能をもつものであろう。南側の横架板（W2）は、高約28cm、厚約8cm、長2.6m以上で大形材で、東側が約20cmほど高くなっている。材の西端部は主脚に接し終っている。さらに西側へ続く横架材は検出していない。北側は、高約20cm、厚約8cm、長3.1m以上の板材の上に、さらに高約37cm、厚約6cm、長2.8m以上の板材を重ね積みにする。この横架材は主脚（W3）のさらに西側約0.5mまでのびていた。横材と主脚との接合は釘などで固定はしていない。あるいは、有機物の素材（紐・繩等）で緊縛していた可能性もあるが、主脚に横添えするといった感じである。

主橋脚間に径10cmほどの丸太材、辺10cm、長約100cmの角材が河底に打ち込まれていた。計9本を検出、その間隔は約30cmであるが、20cm、40cmを測る箇所もある。また、すべて一直線上に列ぶものではなく、W18、W21などは他の杭列より東へズレている。

南側では護岸用の杭列を6本検出している（W5～W10）。径約7cmの芯持丸材を使用、樹皮も残るものが多い。ほぼ東西一直線上に列び、間隔は約35cmを測る。ただ、W10のみが大きくズレている。

主橋脚の横には、比較的大きな矢板が打ち込まれている。W19-1～4、W20-1～4、である。幅約20cm、厚約7cmの材を用いるが、整形は雑である。W19の一群は橋脚から約20cm離れている。W20の一群は横架材に設している。どの矢板も南北に打ち込まれており、各々が若干重複するようである。横架材を狭み込み固定する機能もあると思われるが、それ以上に、補助脚として橋桁を受ける機能があったのではなかろうか。

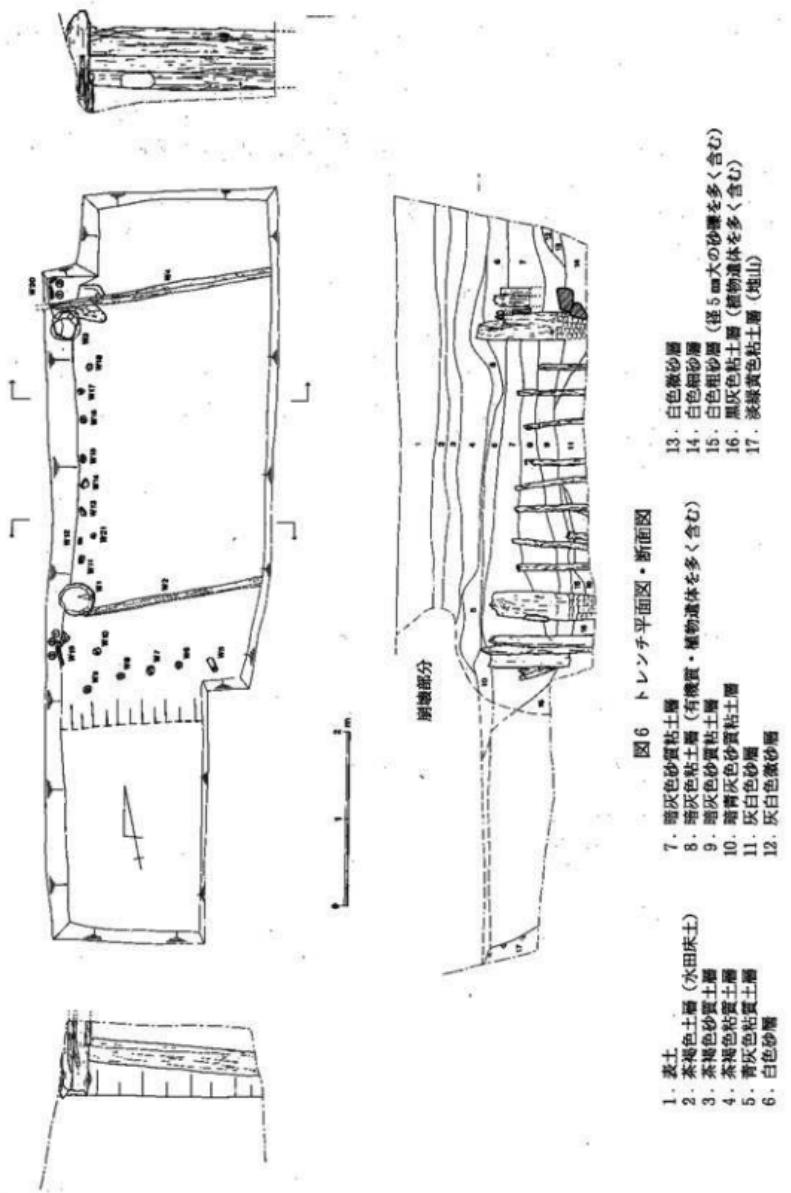


図6 レンチ平面図・断面図

1. 褐土
2. 茶褐色粘土層（水田底土）
3. 茶褐色砂質土層
4. 茶褐色粘土層
5. 青灰色粘土層
6. 白色砂層
7. 青灰色砂質粘土層
8. 青灰色粘土層（有機質・植物遺体を多く含む）
9. 青灰色砂質粘土層
10. 青褐色砂質粘土層
11. 灰白色砂層
12. 灰白色砂層
13. 白色微砂層
14. 白色細砂層
15. 白色粗砂層（径5mmの大砂礫を多く含む）
16. 黑灰色粘土層（植物遺体を多く含む）
17. 淡綠黃色粘土層（地山）

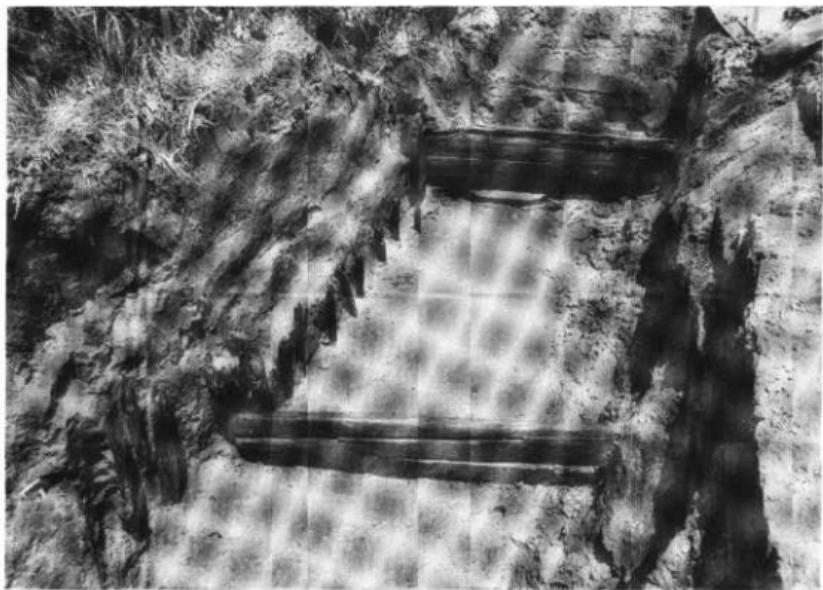


写真4 トレンチ全景（南から）

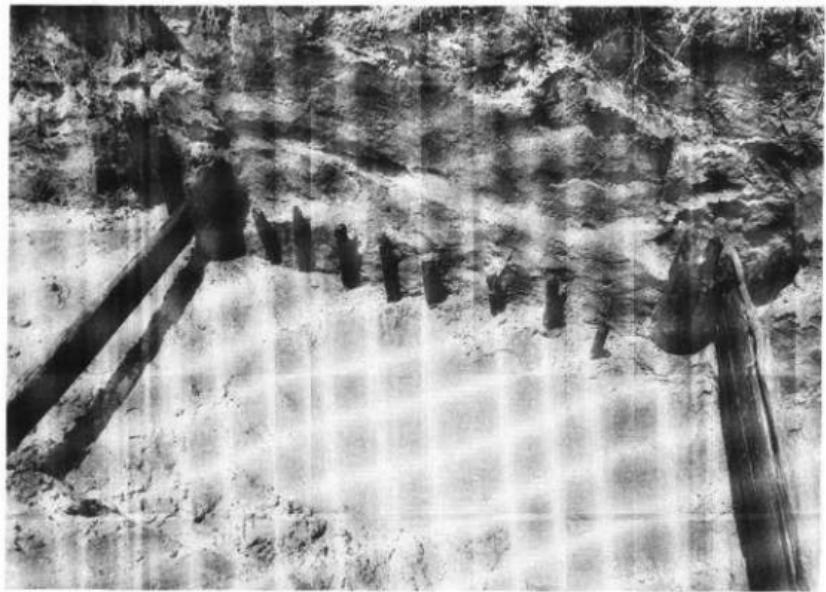


写真5 トレンチ全景（東から）

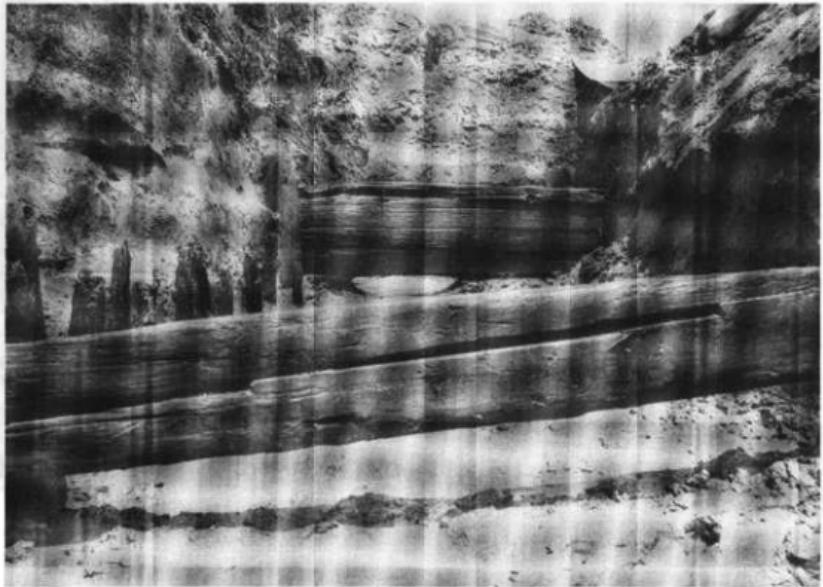


写真6 橋SX-01細景（南から）



写真7 橋SX-01細景（南東から）

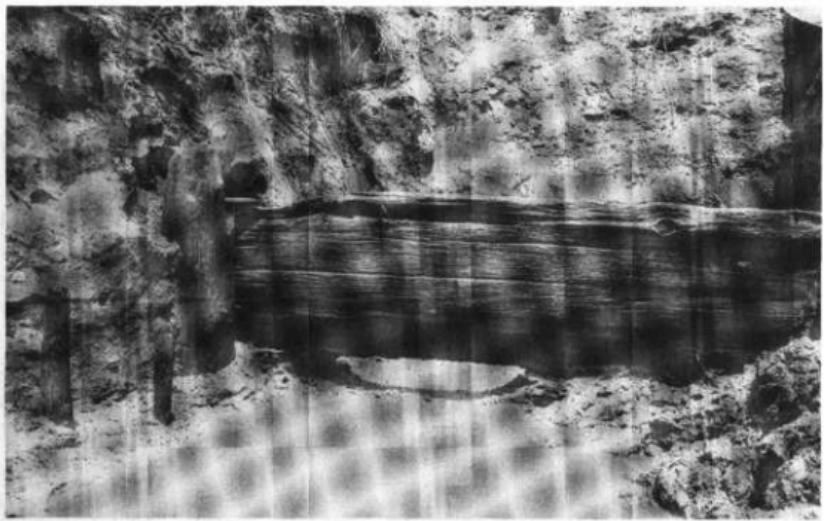


写真8 橋S X-01細景（南から）

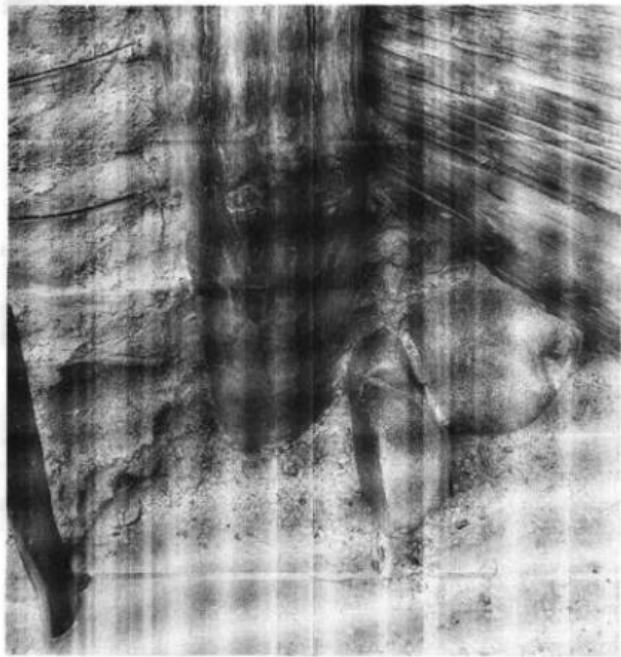


写真9
橋S X-01細景（南
東から）



写真10 橋SX-01細景（北から）

3. 遺物

土器類を中心にコンテナ半箱ほどの出土量に留まり、図示できる個体も少ない。

須恵器・壺L（図7-1、写真11-1）

口径9.4cmの口頸部破片。口縁端部は受口状となる。回転ナデによる調整で、灰白色を呈する。部分的に緑灰色の自然釉が付着する。

須恵器・壺（図7-2、写真11-2）

口径15.9cmを測る直口壺の口頸部、体部外面に叩き、内面に同心円文叩きが残る。口縁部外面にはカキメを施す。口頸部内面の接合部には指頭痕が著しい。外面には緑灰色の自然釉が付着する。河道左岸の地山直上に堆積した黒色粘土層より出土している。

須恵器・壺（図7-3）

底部の破片で、底径8.7cmを測る。高台は外下方にふんばり、凸帯状に突出する。全面に回転ナデ調整が認められる。白色砂素を多く含み、灰白色を呈する。

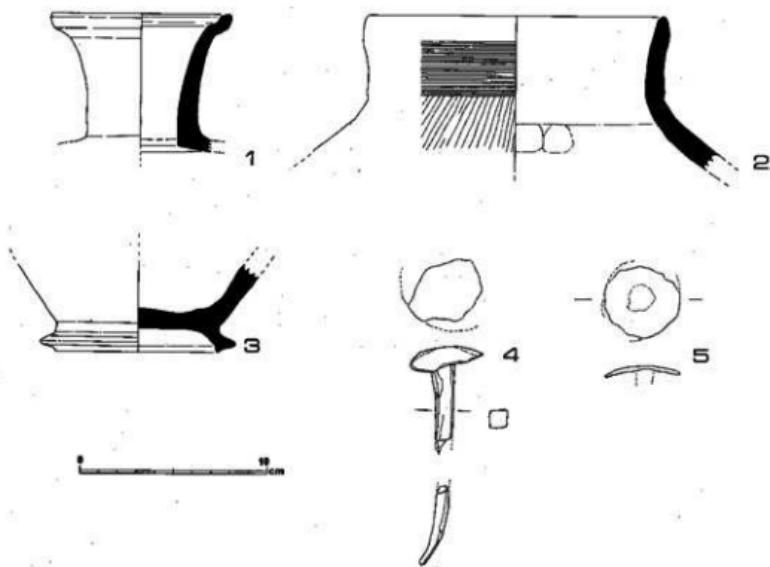


図7 土器・鉄製品実測図 (S=1/3)

金属製品

円頭釘 (図7-4、写真11-4)

横架材 (W4) に打ちつけられていたものである。頭部の破損は著しいが、径5cm前後の大きさであろう。脚部は先細りし、断面は方形、全長不明である。

円頭釘 (図7-5)

頭部形は約4cmで、1より少し小さい。頭部は薄く1~2mmほどで、断面は笠形となる。脚部は失われている。

和同開珎 (図8、写真11-3)

銅製。銭文は細く比較的明瞭であるが、和字の上部の鋳上りが悪い。いわゆる隠開和同である。外縁外径24.33mm、内郭外辺は8.6mmを測る。

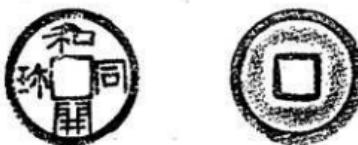


図8 和同開珎拓影 (S=1/1)

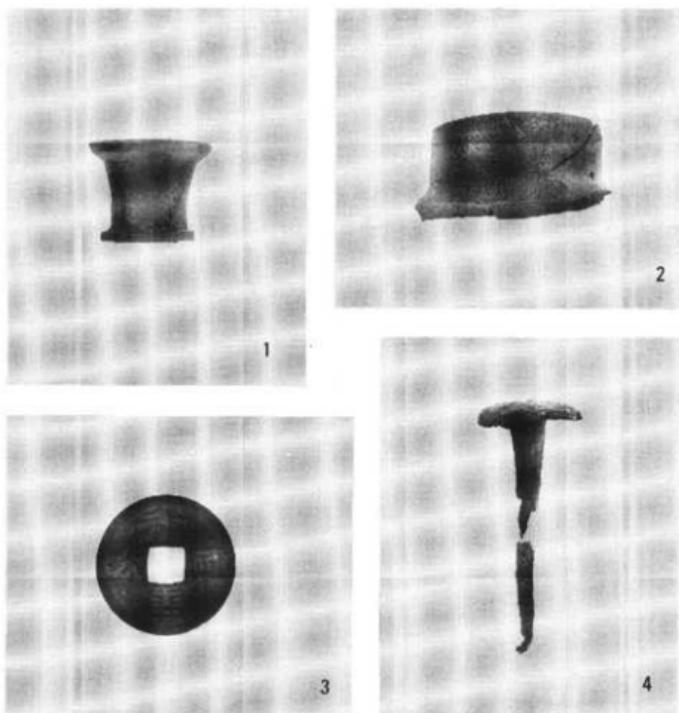


写真11 出土遺物



写真12 橋S X-01細景（南から）

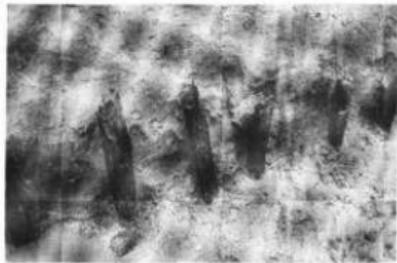


写真13 橋S X-01細景（南東から）

橋の構成部材

横架材（図9-W2、図版14）

左岸の護岸板（W2）である。 $(260) \times 28 \times 8\text{ cm}$ 。材の左端は生きており、この部分が橋脚（W1）に取り付く。他端近くに釘穴がある。その部分の裏面は幅約30cmに方形の圧痕がある。釘穴と圧痕は関係するものである。転用材である。

横架材（図9-W4①～③、図版14）

右岸の護岸板（W4）である。3枚の板材を重ね合せて構成される。（①～③）。①は最も下に位置する材で、 $(310) \times 20 \times 8\text{ cm}$ 、図の左端に橋脚（W3）がくる。表面に方約1.5cmの釘穴が2ヶ所に認められ、その間隔は179cm（6尺間）を測る。釘が打ち込まれた部分の裏側には、W2と同じ

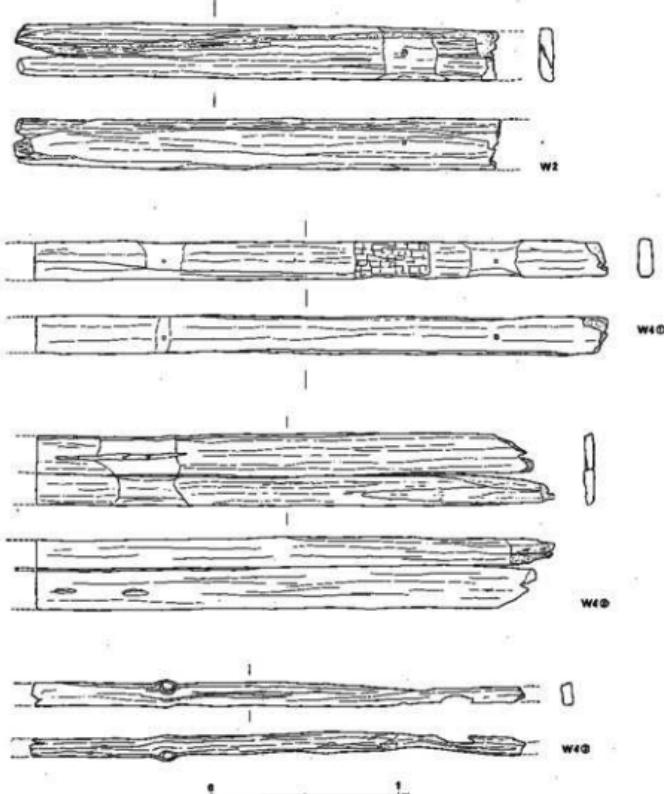


図9 橋の構成材1 ($S = 1/30$)

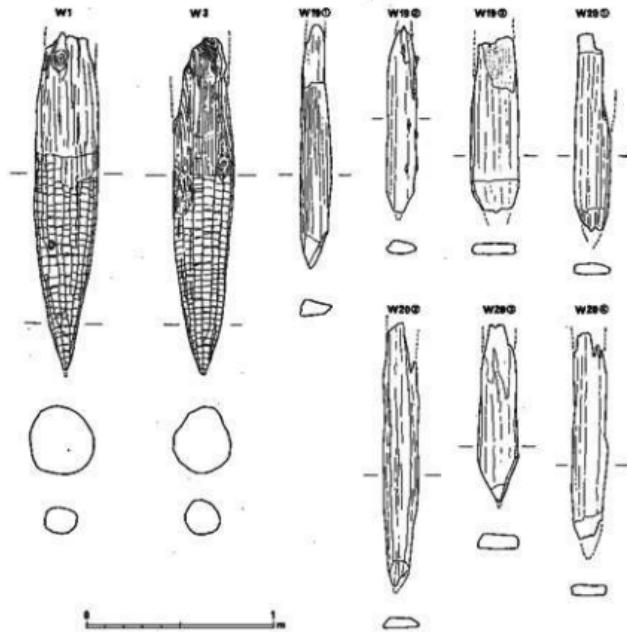


図10 橋の構成材 2 (S = 1 / 30)

じ幅約30cmの圧痕がある。それらの間に手斧痕の著しい部分がある。W2と同じ転用材である。材、②は(279)×37×5cm。釘穴は認められないが、先の2例と同じように浅く削り込んだ部分がある。材、③は最上部の構成材。(265)×13×6cm、著しい加工痕などは認められない。

橋脚 (図10-W1、図版14)

径35cmの芯持材。残存長180cm、先端を手斧で尖らせる。上半部は軽く面取る感じ。

橋脚 (図10-W2、図版14)

橋脚W1とはほぼ同じ大きさで、かつ、同じ整形痕を留める。上半部は軽く面取るように整形する。六角柱や八角柱といった柱頭になるわけではない。

矢板W19 (図10-W19-①~③)

①と②は規模、形状ともに類似している。材の一端を粗く削り尖らせたものであるが、材の断面をみても判るように整美な矢板ではない。③は(90)×25×6cm、扁平な材を用いる。

矢板W20 (図10-W20-①~④)

W19と同じようなもので、調整も粗い。①は(105)×19×6cm、②は(140)×19×6cm、③は(95)×21×8cm、④は(110)×18×5cmを測る。

杭(図11)

河道の南岸に打ち込まれた杭(W5～W10)は、すべて芯持丸材で調整もほとんど施さない。W5には樹皮が残っている。いずれも径6～7cmの細材を利用する。W7の杭頭が遺存しており、全長は80cmほどのものと思われる。

橋脚間に打ち込まれたもの(W11～W18、W21)は芯持材ではない。廃材を再利用したものであろう。断面長方形を呈するものが多い。W18は扁平な材を用いる。これと同じ形態をもつものが河道内より出土している(図11)。また、W19-④は芯持丸材である。

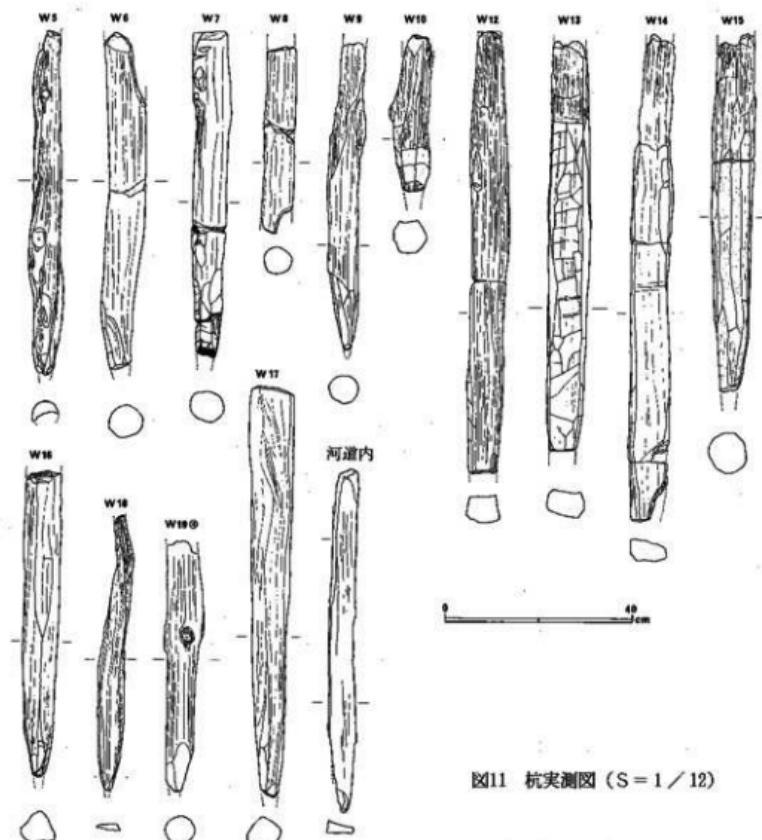


図11 杭実測図 (S = 1 / 12)

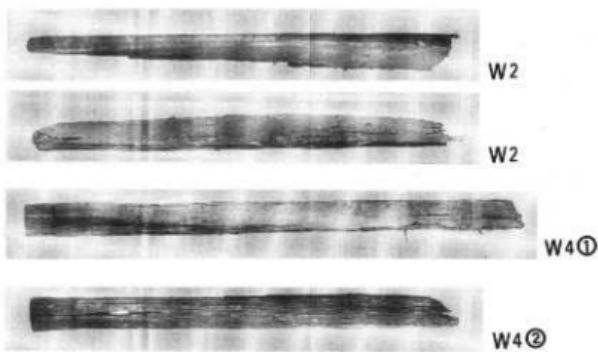
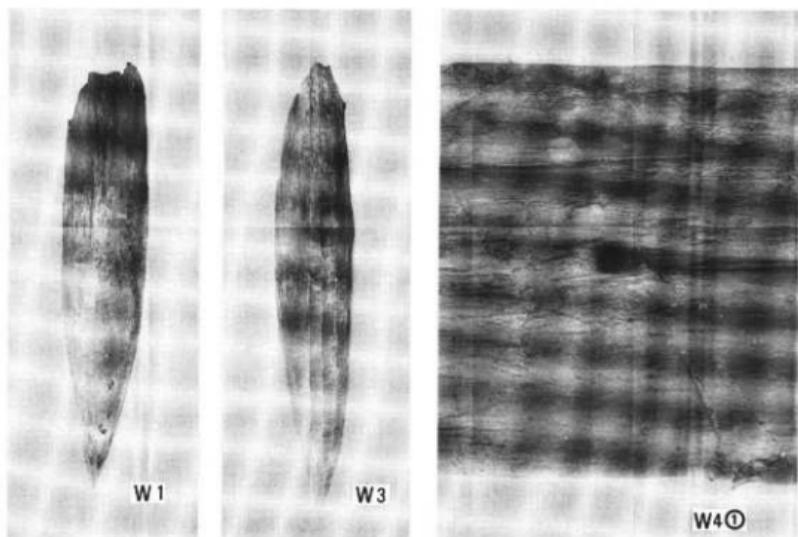


写真14 橋の部材

IV. まとめ

第2・3次調査ともに小規模なものであったが、下ッ道の構造の解明に多少ならずとも寄与できるのではないかと思う。以下、若干のまとめを行いたい。

まず、第2次調査の成果をまとめておく。トレンチ上層断面図から知れる東側溝の幅は17.04mであるが、トレンチ自体が国土座標軸に対して約30°振れている（東偏北）のでこれを修正すると、座標軸（Y値）上で得られる数値は14.757mとなる。深さは1.1m以上である。下ッ道第1次調査で明らかにされた東側溝の規模は、幅11m、深さ2mである。両者を比較すると、2次調査地の方が約4mも幅広くなっている。また、平城京六条一坊では幅11.3mで検出されており、やはり3.5mほど幅が広い。はたして、第2次調査地点では他の地点に比べ幅広の側溝が設定されていたのだろうか。この点については、後の面的な調査を経なければ結論できないと思う。ただ、今回の調査地点で下ッ道のベースとなっているのは、ひじょうに脆弱な河川内堆積砂層であり、側溝の壁部を補強するための貼付護岸が認められたことはすでに述べた通りである。すなわち、脆弱な土層をベースとしているため、路面部分などが崩壊し、当初の設定幅を上回る側溝幅をもつ結果となったとも考えられるのである。この点の解決は将来の面的調査に委ねておこう。

次に東側溝芯の座標値が得られたので、国上座標に対する振れ角度（北偏西）を検討しておこう。

第1～2次調査地点間では、0°59'37"、第2次～六条一坊間では、0°9'14"、第2次～朱雀門北辺間では、0°13'00"となる。これまで求められてきた東側溝の振れは0°15'台～0°19'台であり、こうした成果と今回の成果は大きく違ってきている。これは先述の点とも関連していると思われる。いずれにせよ、東側溝の幅とその芯座標の確定には、今少し広範囲に及ぶ調査をまって再検討されるべきと思う。

さて、側溝の開削と埋没の時期について、前者は不詳とせざるを得ないが、埋没時期については今回の出土土器からある程度判明する。すなわち、溝内最終堆積層であるA層から黒色土器A類の碗（図示不可）が、また、F層から須恵器壺の出土が確定しているので、これらの土器群が示す年代を一応埋没時期と考えておく。その時期は9世紀中頃～後半であり、第1次調査で明らかとなっただ埋没時期とも一致する。

第3次調査の橋は、まったくの偶然によって検出したものである。当時、トレンチの西肩部にはコンクリート製の電柱が立っており、橋脚を検出したときも、古い木製電柱の残りと思っていたのであった。近辺には旧河道を示唆するような斜行地割などはまったく存在せず、河道の存在には否定的であった。ただ、現菩提仙川が東西の正方位に河道を固定されているので、旧河道は地形にそって南西流していたであろうという予想はもっていたが。

さて、今回検出した河道SD-01は菩提仙川の旧河道と考えるのが適当であろう。当初の河幅は約10m以上である。この頃にも当然橋が架けられていたと考えられるが定かでない。河道の埋没が進み、約4m幅のときに橋SX-01が架構されるようである。この実質的な河道幅では自然河道

の本流とするにはやや細いように思える。あるいは、支流化したときの河道かもしれない。

橋が架されたのは、SD-01の岸部に堆積した黒色粘土層から出土した須恵器直口壺の年代をもって、その上限と考えることができる。

橋は桁行1間分を検出したにとどまり、構造の詳細は知れない。少くとも、主橋脚は打ち込み方式で設置し、護岸材を添えること、また、橋脚間に柵を組み水流の統御を行ってことなどは明らかである。なお、護岸材をはさんで橋脚と対になるよう打ち込まれた矢板についてはその機能を明確にし得ないが護岸板の固定と同時に、橋桁・梁を受ける機能をもったものと推測しておきたい。護岸板として使用されていた板材は、橋板である可能性が高いと思われる。同じような例は、平城京左京九条三坊で検出されている。

参考文献

- ・奈良国立文財研究所編『平城京東堀河－左京九条三坊の発掘調査』1985年、奈良市教育委員会
- ・奈良県立橿原考古学研究所編「稗田・若槻遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1980年度) 1982年、奈良県立橿原考古学研究所
- ・奈良国立文化財研究所編『平城京朱雀大路発掘調査報告』1983年、奈良市教育委員会

平成4年3月31日発行
大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

稗田環濠
発掘調査報告書

編集 大和郡山市教育委員会
大和郡山市北郡山町248-4

発行 大和郡山市建設部土木課
大和郡山市北郡山町248-4

印刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町3-464